

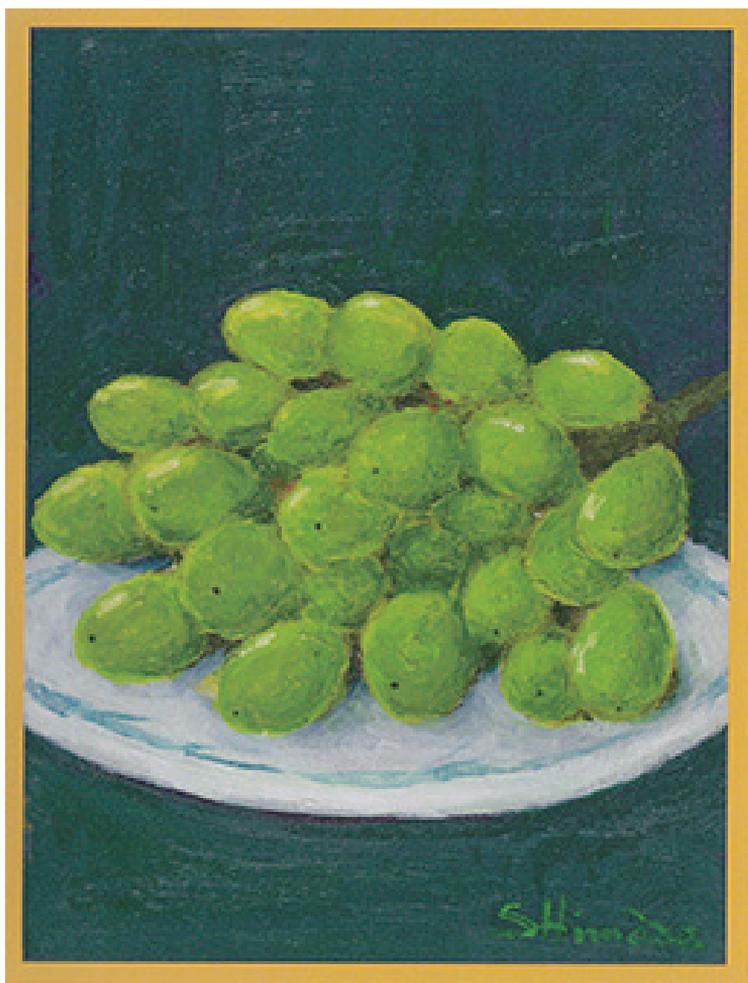
冬 雷

短歌雑誌

TOURAI

二〇二六年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第六十五卷第三号（通巻七六九号）

大友柳太郎歌集『渚』鑑賞（冬雷短歌会文庫 032 別冊付録）

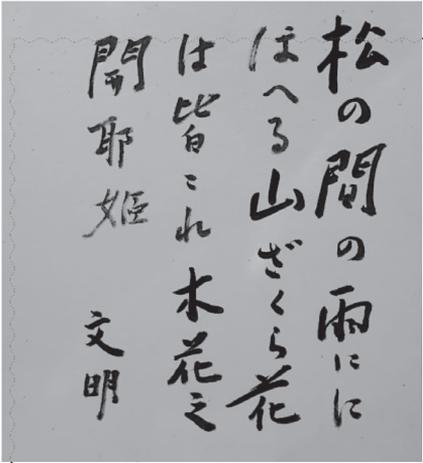


3月号・2026年

土屋文明先生の色紙②

さてこの歌、さりげなく「木花之開耶姫」と表記しているがこれは一般の表記と違い別称の一つとなっている。「古事記」では「木花之佐久夜毘売」「日本書紀」では「木花開耶姫」であり、共に「このはなのさくやびめ」で助詞の「の」が入り「びめ」と濁って読むが、後者の表記では助詞の「之」が入っていない。文明作品はこの二つの中間で助詞「之」も入れるがえて読まない。

さて書だが、生き生きと弾む力強い文字が左に流れたり直にすくと立ったりするもの美しいバランスを保ち人格の現れるようだ。「文明」の署名は特徴ある右下へ



ハライの長く伸びる「文」と逆に左下へ傾き伸びる「明」。筆は、「にはへる」まで一筆、墨を含ませ「皆これ」までを書き、また墨をたっぷり含ませ結局へと纏めあげたものか。〈編集室〉

2026年3月 目次

冬雷集…………… 1
 作品一…………… 18
 三月集…………… 32
 作品二…………… 42
 作品三…………… 50
 一月号冬雷集評…………… 桜井美保子…16
 一月集 / 残響集評…………… 鈴木やよい…17
 一月号十首選（冬雷集・一月集）…………… 37
 一月号作品一評…………… 小林芳枝・藤田夏見…38
 一月号作品二評…………… 井上菅子・江波戸愛子…40
 一月号十首選（作品一・作品二・作品三）…………… 55
 一月号作品三評…………… 山本三男・橘 美千代…56
 歌集 / 歌書御礼…………… 編集室・佐藤靖子…58

冬雷集

大山敏夫 埼玉

「ただいま」と言ひてをみなに戻る家「いいね」と思ふ束の間ふいに
握り飯ただに美しく結びたる若き日の妻とほき思ひ出
手結びの握り飯のかたち美しく友のまへにひろげ食ひし遠き日
コンビンも無く働きし夜勤の日々妻の握り飯広げて食ひき
冷凍してしまひこむ妻の握り飯変化して今はほぼ四角形
握り飯は三角形でなければと思ひ込み強しかの日も今も
老妻と言ふなきわれよ握り飯くらゐ三角の形にあれよ
はづみにて吞んでしまひし柿のタネその後のことは確認せず

赤間洋子 東京

孫が来る正月料理の定番は我が腕振るふコロッケ数多
コロッケの中身は馬鈴薯と玉葱と鮭缶又はコンビーフ缶
鮭缶のコロッケは我家の伝統なり肉を食べない姑の発案
孫二人息子と共に先づ乾杯コロッケと寿司で話が弾む
社会人になりたる孫が今年また花束に添へ年玉くれる

年上の女の孫は二月には結婚するとの嬉しき知らせ
今年はじめのウォーキングの会に参加する背筋伸ばして歩く練習
東京の正月は晴天続きウォーキング会員は中高年ばかり
受付で名前と年齢尋ねられ小さき声で九十歳と答ふ

兼 目 久 栃木

夏休みに中禅寺湖の湖岸にて水泳を実施すよき時代なり
一頭が五億三千万円気の遠くなるやうなマグロの値あたふた
昭和35年教員の挨拶めぐりにて先輩小声にて軍歌を口ずさむ
寒い寒い零下三度の一月一日寒さをこらへ冷酒をあげる
関西で咲き誇ると思ひしに背高泡立草は当地でも咲く
新聞紙を下敷にして書きたればところどころに斑点が出る
習ひきし中国語読んでみる中国語漢詩すらすら読める
男体と女峰の山頂がくつきりと地元の山の小高き丘見ゆ
過ぎし日の歩みを顧み一月一日よしやるぞとの思ひをこめて

森 藤 ふ み 東京

首筋の痛みにシッ普薬を張り料理をつくる明日は元日
歩き初めは子と連れ立ちて初詣去年より人出少なき感じ
ガラ空きの車内の通路の両側に分かれて座る二人の媪
通路越しに向き合ひ座る媪二人の手話にて会話

ガラ空きの車内にあれば手話の手の動き大きくゆつたりとして
浅草にて降りて行きたる媪二人互ひに手と手取り合ひながら
枝先の固き芽のもと丸き実の一つが揺れるハンカチの木に
カーテンの隙より覗く朝空に光冷たき三日月のあり

みどりさん

櫻 井 一 江 東京

わが夫の悔みに山口より来られし恩義思ひしなれど宅にて拝礼
夫婦とも午年生れ来年は八度目の午年迎へる筈の
夫亡き同志なればと「みどりさん」電話の声の艶やかにあり
久々の電話に近況語られし言葉に際立つ喜び感謝
「年甲斐もなく声だけは変らんの」滑舌の良きみどりさん答へき
永年を華道教へしみどりさんへ手向ける花は日比谷花壇に託す
身罷りし人の面影ゆらゆらと逝きたる親族多かりし巳年

有 泉 泰 子 山梨

庭仕事精を出しすぎ腰痛め病を知らぬ夫も動けず
病とは縁のなかりし夫なりき腰動けずに一週間横になる
少しづつ痛み治まり公園へ子の声広がり青空みえる
今日は私の誕生日赤ちやんになつて生まれた日お父さんお母さん有難う
戦時中幼子三人育てくれ父母に感謝す私元氣です
新年に父母姉妹会ふこともなく我が家に娘孫の集ふ年となりたり

娘孫共に集ひて恒例のきんとんを作る味が楽しみ

富田 眞紀恵 富山

昨日まで吾の心にくすぶりし事までおほふ雪の白かな
いままでの吾のあやまちひつそりとかくしてあげると雪の白さよ
遠い日の吾の幼な思ひ出を静かにつつむ雪の白です

青木 初子 神奈川

大地震おきては欲しくないけれど日本列置島揺れる日多し
背の縮みブレーカー落すも楽ならず便利な器具に頼る他なし
心配事一つ減らさん取り付けに無理なき値と知る耐震ブレーカー
我が家より火事を出したくあらざれば耐震ブレーカー取り付けきめる
電気屋に耐震ブレーカーの取り付けを直ぐ頼みたり手持ちに足りて
自転車のハンドル握る手の力弱まるを感じ横風受けて
空高く青空なれど強き風吹いてゐるらし太木の撓る
自転車に強き横風恐ろしくバドミントンの練習休む

中村 晴美 茨城

寒き朝カーテン開けて陽を入れぬ黒の瓦にうつすらと雪
冷蔵庫開けてしばし考えるなぜ開けたのかわれは痴呆か
買物後スマホのメモと照合す記憶力は大丈夫なり
一人では手続き無理か姑の郵便局へ夫婦で付き添ふ

百万円われに預け姑の買物メモを時々よこす

コンビニへ手押し車に行くをやめ姑弱るか九十四歳

大晦日平穩無事な一年と感謝しつつ蕎麦を啜る

ひさびさに心臓のあたり苦しくてあと十キロの減量したし

橋本文子 鳥取

宮参り社殿に響く大太鼓赤子は泣かず神の守りに
厳かなる太鼓と祝詞響くなか幼子眠り夢で聴くらむ
曾孫を抱けばじつと我を見るつぶらな瞳平和よ続け
まつすぐな赤子のまなざし愛ほしく我が笑へばひ孫も笑ふ

吉田 綾子 ☆ 茨城

週一の訪問リハビリ有り難し手足の痺れ徐々に和らぐ
無理をせず心にゆとりをモットーに老いのリハビリ見守り呉れる
身体の歪み夫々摩り呉る温き両手は魔法のごとし
一、二、三と同じ動作を二十回 次、次、次、と動きの変る
ようやくに落葉の始末に箒をば使い熟せる我が身となりぬ
秋おそく裸木となりたる山紅葉年明けくれば枝先赤らむ
余り有る静けさ極む新年の庭の空気に平安を覚ゆ
炊きあがる七草粥を神仏に供える今朝の寒の厳しき
鏡開き寂しくなりぬ神棚の三方片付け掛け軸外す

柚八つ浮ぶ湯舟に入りをれば心しづまる夢想の時ゆく
湯舟にて茫と過ごすひとときの安らぎ誘ふ柚の香のゆげ
茫として流るる時間ときの快き柚の香ただよふ湯に浸りゐて
一年の過ぐる間隔ちぢまりて冬至南瓜はこのあひだのやう
初茜気分あらたに二十分歩き詣づる黒沼神社

振舞はるる甘酒飲みて願ひたる子らの安寧・ガザの停戦
米中露三国同盟結ぶかもトランプに見る中露とのデール

その国の主権は脇にさて置きてロシアの主張に組みすやトランプ

高松 美智子☆ 栃木

のど食道胃の腑を辿りてゆつくりと一杯の白湯は身体に沁みいる
ストレッチボールに背骨押し当て手を上下肩甲骨の動き確かむ

股関節に左右差あること確かめて右の臀部を念入りにほぐす
姑を見送りて今ルビー婚夫婦の形も変われる兆し

嫁入りに持ち来し布団を陽に当てて初めて父母を泊める正月

暖房いらずの南の縁にひかり溜め枝葉太らす金のなる木

着ぶくれて遊びをせむと次つぎにブランコ雲梯子供等の声

四両の電車が緩く傾きてカーブを曲がりて田圃広がる

高橋 説子 栃木

竹製の足場でなくて安心す改修中の佐野文化会館

星すでに現れてゐる空仰ぎ孫の上着を抱へて向かふ

ひとりでも「いただきます」と声に出し殺風景にならぬ暮らしを

ぶ厚くて重く飲みづらいマグカップをやつと捨てたり割れてないのに

諦めのよい性格と怠け癖が落ち葉に負けて箒投げ出す

四、五分の余裕ある日は寄り道し墓石を撫でて散歩に戻る

糖尿に効くよと自作の菊芋を持ち呉るる友に庭の蜜柑採る

笑ひつつ傷つきぬわれ学童に「でげえばあちやん来た」と言はれて

「冬雷」の会員勧誘キャンペーンをすぐに始めよう一人一名

酒向 陸 江☆ 東京

リコーダー発表会の古い吾等十五名の音色が響く

嫁ぎたる娘二人もかけつけて九十五歳の奏者を見守る

ベテランのリコーダー四重奏の応援が演奏会へと高めくれたり

「ゆる仲」と名付けて集いし十年間リーダー役を若きに譲る

正月は八十一歳誕生会子等の集いてにぎやかな茶の間

子供達の話は尽きず聞き役の吾は唯々うれしいばかり

新春

天野 克彦 大阪

新しき年の始めに浮かぶこと日々に成りゆく西之島新島

さかさまに年は逝かぬか成り出でし西之島新島行く未見たし

国生みの神話の世界に遊ぶかなイザナキの神イザナミの神
賑はひの春着の神社を逃れ来てひとりゆくなり賀茂川堤
空の雲うつしながるる賀茂川の鴨どりいくつ淀みに浮かぶ
ロシアより平和の使者のユリカモメ三千キロを物ともせず
カムチャッカ半島飛び立ちユリカモメ京の都を軽やかに翔ぶ
獅子頭担ぎてをとこふたりくる四条大橋雪舞ふなかを

大塚 亮子 東京

年末に訃報届きて住所録に友の名を消し涙溢れく
電車にて席を譲られ腰降ろす嬉しさ寂しさ相半ばして
七草を母と摘みにし思ひ出は遙かとなりて歳重ねをり
芹なづな口遊みつつ風寒き土手に七草探して摘みき
摘みきたる七草入れて母の炊く大鍋いつぱいの粥旨かりき
正月に食べ過ぎたるを思ひつつ土鍋にゆつくり七草粥炊く
七草粥を土鍋に焚きて夫と食む漬物たつぷり大き器に

ピンシャン体操

嶋田 正之 埼玉

桂樹の下に屈伸運動を為しつつ想ふ遠方の友
楠木を疇としたるキジバトの動く気配をベンチに見上ぐ
近隣に住みたる人の一人減り二人減りして枯草の庭
同時期に家建て住みし人等みな当然にして高齢者なり

高齢者集ふピンシャン体操に新参者にて参入を決む

街なかの公園内の集会所集ふ老人二十人ほど

リーダーの掛け声聴きつつ手足振る使はぬ筋肉急に目覚める
この土地に永年住めど名を知らぬ人の多さに愕然となる
道端に世間話をする習慣男等になく疎き近隣

江波戸 愛子☆ 埼玉

ぼんやりと見ている庭にわが夫の突如あらわるじょうろを持ちて
石垣島にいますと孫よりメールあり足透きとおる海を写して
沖繩の八重山そばにラフティを添えて土産と孫の持ち来る
貰いたる八重山そばを食べながら沖繩県の話の尽きず
沖繩の土産のバナナみどり色黒くなるまで食べられぬと言う
アテモヤという名の果物持ちくるる娘に食べごろ食べ方を訊く
友と行き君と行ききたる沖繩の海を想いて眠れずにいる

橘 美千代 新潟

新年に帰省せむ孫と娘にと絵本をえらぶ大晦日の書店

クリスマスプレゼント用の絵本に不備ありていまだに渡せぬままに
大晦日に奥歯のかぶせもの取れて元旦に向かふ歯科救急へ
除雪車の積み上げて去る雪の塊シャベルで崩し路上にはふる
娘らの車が入られるやうにいそぎ車庫前まはりを除雪す

歩みくる赤児を抱き娘らの光をまとひ玄関までを

冬木々の枝越しに差す年明けの日まだ明るし今日午後おそく
雪から雨に変わりて浄火の火の消えぬ燃え残りたるお札お守り

ブレイクあずき☆ カナダ

春の夢見ずに撃たれて死ぬ熊よわたしのはるけき祖国の熊よ
静かなる数字読みたしひたすらに熊の恐怖を呼ぶ記事よりも

山畑の柿の実残すという歌を書き留めておく氷雨降る朝

大戦の時代が来ると説く友は麦を育てる銃を手にとる

またしてもわれらは昏き道ゆくか散弾銃は鈍く光れり

小さき川渡るときさえ金管の声にしきりに呼び合う雁は

午前二時君につつかれ目が覚めるシャークが来ると叫んでいたと

悩み事ぼつりぼつりと打ち明けて坂のぼりゆく海を見るまで

冬至すぎ凍える空の東には朝へと向かう勢いのあり

山本三男☆ 群馬

鴨泳ぐ川の写真に付け加え散歩のことを賀状に書かん

スーパ一の雑踏のなかに眠る子は騒がしき音に覚めることなし

キンカンは無傷のままの実の多しムクドリの声をこの頃聞かず

スポイトでサボテンの鉢に水落とすあと三か月は寒きの続く

散歩路にカマキリの巣を見つけたり枝ごと折りて持ち帰り来る

われを生みし不思議な力を思いおりカマキリの巣を間近くに見て

もう一度カマキリの孵化を見てみだし奇跡のごときあの瞬間を

この朝もムクドリに来てカマツカの実を少し食い飛び去りて行く

鈴木 やよい 東京

年末の終はらぬ片付け捨て置きて見上ぐる雲は優しきうさぎ

埃かぶる箱にみつけた懐かしきツリー飾りを一纏めに捨つ

何もせぬクリスマスなればせめてもと買ひたるケーキは食べ切れず残る

やり残しがありても年は明けゆくと大き蕾のユリ買ひて帰る

登りきて輝く陽を受け立ち止まれば肩で息する吾が影のあり

正月の干支の榊酒なみなみと注がれてをれど枡のみを買ふ

新しき注連縄かかる水行場に薄き衣で人の現る

勢ひよく被りたる水は足元に音たてて跳ぬ冷気のなかで

中村哲也 宮城

熊避けの鈴の音絶えて学校に通ふ児童の冬休みを知る

世の中はクリスマススイブさりながら仕入れの入力作業に追はる

小一時間掃除もそぞろに作業して年末最後の就業終へる

青空の仙台にゐて早々と雪の秋田に行くをためらふ

二十時に発つ最終の花輪線英語の会話がひと際響く

外つ国の人等は安比高原でなべて降りたり三人残る

元日は時より吹雪く空模様次の日やうやく青空見たり
夜十時盛岡発の新幹線ほぼ満席の人等静もる

飯 嶋 久 子 ☆ 茨城

夜読む文庫本の文字小さきに夫の形見の老眼鏡探す
独り居の友は殊のほか入院生活楽しみし様ほっこりとする
膝関節手術終えしすぐあとに歩行リハビリ始まると云う
歩行器にすがりて歩みほどなく杖にやがて手ぶらと報告のあり
外出はまだまだ先のことなりそろりそろりと参りますと
三ヶ月の固きコルセットに解放されシルバー体操久々に参加

田 端 五百子 岩手

参道を登りてゆけば行灯の粉雪のせて初日に輝く
悴む手あはせ拝がむ御来光碁石岬は初日に照り映ゆ
溶接するまぶしき火花身に受けつつ鉄打つ鍛冶師は汗ふりこぼす
通り雨山道抜ければ正面に片足欠けたる虹の輝く
稲光天地を繋ぐ臍の緒か一時遅れて雷鳴とどろく
稜線に数多の雲を掃きよせて早々沈む冬の入り日は

飯 塚 澄 子 東京

朝ごとに庭の紫木蓮眺めみる細き枝先小さな蕾
「めぐりん」に乗り池畔で見る桜樹には枝にいっぱい小さき蕾

はがきには9・3・7の数字あり名取取得の年月なりき
八年の年賀はがきの添書きに構図が好きよ素晴らしい作とあり
馬・ウマ・午と三色に記す筆文字の見事な賀状ペン書きも添ふ
祖母と共に孫は高尾へ初登山案じて過ごす一月五日

戸部田 とくえ 福岡

しみじみとけふも聴きある「イマジン」只管ねがふ歌詞かみしめて
何事も善意に受けて穏やかな理想の老いになりつつあり
東山魁夷『唐招提寺への道』を読む御影堂に思ひ重ねて
大学生その子の自立に伴ひて週に一度の便り厳守せり
四時起床ならひの朝の清々しさ先づは自己流体操
米ぬかでゆでたる大根あまみ増すひと手間かけてけふは煮込みぬ

江 藤 ひさ子 大分

「冬雷を退会しました」古嶋清子様からのお年賀
古嶋清子様にお電話すれば息子さん「母は亡くなりました」と
子も孫も帰省はならず老いふたり越年・迎春静かに過す
息子らの未来のみ考へて育てたるその正否を思ふ今更
「手元から絶対離さぬ」を貫きたる友の子育て思ふ今更
臘梅が咲いてゐるよと夫が呼ぶ庭に急ぎつ何は兎もあれ
踵上げ枝引き寄せて嗅ぎたればほんわか甘く香る臘梅

腹ふくるる蟲が山椒の木にをりて近づき見れば蜻蛉にあらず
手を広げオクターヴ以上届く指ピアノ上手になれると言はれき
雨戸閉むる空に昇りてきたる月雨戸を閉めずまた来て見をり
救急車に運ばれ意識なくなりぬその後二日の事を覚え
草刈を頼みたる庭日の経ちて瑕根のこりて水仙いでつ
草刈を頼みたるあと石路が畑の縁に揃ひて咲けり
若くして見たりし映画の音楽の聞こえてきたる心の揺らぎ
実生にて育ちる鉢の臘梅の匂ひみるとぞ言ふ人のなし
人を襲ひ古躰と言はれ駆除されきとぞ熊は言はれをりニュースにて

筑前と肥前の国を振り分けて脊振と言ひならしたる古人しらず
脊振嶺に立てられし国境「ひぜんのかに」と告る南を向きて
寒き夕べ脊振にあひし子狸のその後を思ふわれ老いたれば
豊満川の土手すぎをれば筑紫山地の空ほがらかに温き霜月
東の耳納山地の空あかくわたる夕日の尾のながからず
生きるため生きてゐるのよ自らを励ましてをり朝の目覚めに
働いてただ働きし四十幾歳はるかになりぬ劇画のごとく
夕されば遠き高みに点る灯を一目百景と見るもいつまで

友逝きて早き半年終刊号手に取りて持つ涙をためて

父は山茶花健三先生茶の花を好みし明治の男のころ
茶室脇の矢筈薄も未枯れ果て師匠の亡くて幾度の冬
人里に餌を求めて現はるる熊の哀れを小声で話す
平日の客無き店の売物のポインセチアの凄まじき赫
マニユアルに無き答欲し萎えてゆくこのシクラメン助ける技を
名前札あるゆゑメタセコイアなり冬の街路樹己をみせず
おどおどと防空壕で飲みし乳八十五年後の身の崩れやう
夫は菰に包みて椿囀ひしを庭師はぐるぐる巻きにて終はず（*山形庄内地方の方言）
寒いから今宵は熱爛いいかしら遺影に言ひつつ晩酌供ふ

故里の訛言葉に癒される昔ぶ戻る友との電話に
千重に降る雪を憂へる時期なれば忠臣蔵の特番始まる
茂吉の墓めぐる樹木を切りたるとふ切り株際立つ墓地の明るき
大国の国際法を無視せると揺らぐニュースの年明け憂ふ
正月のわづかな星の煌めきて小雪降る中平和を祈らん
降雪に激しき風の伴へば地蔵の細き目閉ざさるごと
境内に光さしきぬ細き目の六地藏らの柔らかな顔立ち

古き映画にてはほへるをみなごも葡萄くふときにブツとタネ吐く 大山敏夫種無しの葡萄が収穫されるようになったのは昭和三十年ごろからという。その技術が開発される前は葡萄といえば種があった。映画の中の美しい女性も口から葡萄の種を吐き出している。人間臭さのある何気ない一齣を見逃さず捉えた。

具沢山の味噌汁好む子戻るまで二三の具を入れ一人分作る 森藤ふみ子と一緒にいる時は料理もその調理法も子の好みになるべく合わせているのだろう。自分一人だけの時は自分好みに。息抜きのような時間かもしれない。

彼岸まで真夏日夏服夏布団一氣に冷え込みセーター羽織る 酒向陸江☆年々残暑が厳しくなる。彼岸の頃まで真夏の氣候でそのあとは一変して寒くなる。氣候の極端な変化は呆れるほどである。生活の面からの具体的表現に納得。

電話では話の通じぬ母となり一方通行の会話が続く 高松美智子☆

年取った親との会話。親の心身が衰えてくると、当たり前前にできるはずの会話も成り立たなくなる場合があるのだと思う。片方の側からの話だけになってしまいい寂しいことである。実際に会って顔を見て話せば会話が出来るかもしれない。次に描く対象探す行動の不自由となる

足老いたれば 嶋田正之
ひとつ描き終えれば次の作品を描くための対象を探す。それは今までも簡単なことではなかっただろう。年齢を重ねて行動も思うようではないという。悩み解決の方向が見つかることを祈る。悩みベビーベッドの置かれてゐたる空間のぼつかりと開き日差しのためる

娘さんの里帰り出産で暫くの間、赤ちゃんがいて娘さん夫婦がいて賑やかだった日々。ベビーベッドが置かれていた空間も今は小さな日だまりになっていてだけ。穏やかな情景だが何処か寂しい。

根津美術館に至る歩道を横並び歩く女性 性が傘差し塞ぐ 中村哲也

仕事を持っていて多忙な作者だが折々美術館巡りを楽しんでいるようだ。この日は根津美術館へ。前に行く女性達も同じ場所へ向かうのだろう。横並びは後ろを歩く者には迷惑だが、そうは言わずに艶やかな傘で道を塞いでいる情景を想像させるところに歌の面白さがある。

晩年の母縫いぐれしかいまきに包まれて寝る肩までぬくし 飯嶋久子☆
かいまきは着物の形をした掛け布団で日本の伝統的な寝具。肩のあたりをすっぽり覆えるので寒い時には特に温かいのだ。縫ってくれた母への感謝とそのかいまきに包まれて眠れる幸せを詠む。

妻もまた午前三時に起きだして別々の部屋で朝まで過ごす 山本三男☆
午前三時とは早起きである。しかし眠りが足りているなら朝まで集中して何かできる。夫婦でもお互いを尊重して、それぞれ自由な時間を大事にするという暮らし方が見える作品である。

積み重ねある短歌雑誌の今日はやや乱れてゐるを揃へる図書館に 梶尾栄子
いつも図書館で短歌雑誌を気にかけているようだ。今日は少し乱れていると言つて丁寧揃えている。歌に対するひたむきさが、そのちよつとした行動に表われている。

秋仕舞ふ庭に掛けたる蜘蛛の巣の見事な織りに払へず残す 東ミチ
晩秋の庭に蜘蛛の巣を見て「見事な織り」と表現している。蜘蛛の巣は邪魔物ではあるがよく見ると美しい。水滴が付いていたりすると、目を見張るほどだ。払わずに残しておくとする気持ちもわかる。遠き日に臨書せしこと憶ひつつ読みある仮名文字に見惚れつ 松居光子

一連のなかに、曼殊院伝来の古今和歌集の複製を見たという歌がある。かつて書に打ち込んだ作者であろう。書に対する気持ちはまだ心の中にある。

夕暮れてにはかに煮物が欲しくなり切干大根二袋戻す 佐藤幸子

何かを無性に食べたくなることはたまにある。夕暮になって急に煮物が欲しくなり切干大根を戻す作者。何か郷愁を誘うものがある。

朝焼けの空眺めつつヨガのポーズ三つ四つ為せば体幹目覚む 同
ヨガのポーズで始まる朝は健康的。朝焼けを見ながら、ゆっくりリラククスしてやっているのだろう。体にも心にも良さそう。

スーパリーの自動掃除機淡々と人混みの中我が道を行く 津田美知子
掃除ロボットがスーパリーで働いている。混雑していても人を避けながら黙々と自分の仕事を続けている。人間のよう「我が道を行く」と捉える視点にユーモアを感じる。

化粧せぬ母の遺品のイヤリング思ひがけない大正生れ 同
大正生れのお母様の遺品にあったイヤリング。普段はお化粧もしなかったのに

と驚く作者。たとえ身に付けなくても、持っているだけで幸せな物もある。大切にしていたのかも知れない。

酷暑にもめげずたわわに実りたる枝豆 送らん名月用 水澤タカ子
暑さを心配していたようだが、たくさんの枝豆が実った。それをお月見用に送ろうと心を弾ませている。収穫の喜びが伝わる。

千里庵は古民家のまま店となり母の生家と似てゐる間取り 井上鈴子
古民家を残した蕎麦屋のようだ。お母様の生家の間取りと似ていると言う。その地方独特の造りなのだろう。懐かしい家を思い出しながら、美味しいお蕎麦を楽しんでいと思う。

亡き友の金木犀が咲いたらし庭より香りて花は見えざり 同
今は亡き友人の金木犀が咲いたようだと香りを知る。友との思い出が蘇ったことだろう。何気ない香りに過去の記憶が呼び起こされることがある。「花は見えざり」に友人を思う寂しさも重なる。

作品一

桜井 美保子 神奈川

台所の棚の片付けしてをれば埃被りて鬼おろしあり

引越しの荷物に入れし鬼おろし使はず過ぎぬ磯子の十年

「鬼おろし使ひますか」「もう要らぬ」歯触り固きもの苦手となりて

竹製の鬼おろしの埃取り除きありがたうと言ひさよならと言ふ

何十年ぶりに買ひたるクリスマスケーキ揺らさぬやうに改札抜ける

豆電球付きのツリーを飾つたつけ昔のやうにケーキを食べる

スイトピー、フリージアそれぞれ黄の花を選びて小さき花束ふたつ

プルトップの缶詰開ければ蓋の進化見るなり切り口滑らかにして

正田 フミエ☆ 栃木

玉ネギの早生の品種を育ていて収穫早く甘味が強し

玉ネギの保存を長くと思ひ立ち晩生品種を求め蒔きたり

玉ネギの晩生の発芽そろいたれど成長おそく苗作り悩む

畝作り保温マルチ張りたれば晩生玉ネギの植え付け励む

晩秋の風に吹かれつつ玉ネギの植え付けすれば水霜来たり

水霜が朝日にとけて植え付けの間もない玉ネギ凍らずにすむ

水霜に玉ネギ苗の遭いたれば不織布求めトンネル掛けに

斉藤 トミ子☆ 栃木

富士山がくつきり見える山頂は熊目撃の看板が立つ

カメラマン三脚を立てブツブツと独りごちつつファインダー覗く

裏がボアのふわふわの靴下手にはめて朝の散歩の指先温し

下校時の児童見守るパトロール「ばあちゃんいくつ？」と男児こに問われたり

ばあちゃんが大好きと言う一年生我が孫も嘗て言ひし頃あり

高校の部活に励む我が孫は会話少なく笑顔も見せず

成長の証と思う孫の態度祖母の心は時に波立つ

我が乗れば席譲りくれる異国の人ロープウェイに夫と座る

浜田 はるみ☆ 埼玉

ひと桁の気温となりてマスクも防寒になり寒さ身に染む

齡とりて柿を好きになりてから初めて銘柄見るようになる

マスクットはアレキサンドリアと刷り込まれ色と名前が同時に浮かぶ

昨今はシャインマスクットが当たり前我は巨峰とデラに親しむ

焼肉をしつかり食べた翌朝の体調の良さいつもと違う

焼肉屋J A直営で手頃なり食欲出るのもっと行かねば

正月の娘夫婦の来宅が一週間延び買い物延期す

田 中 祐 子 ☆ 埼玉

客用のわが家の皿とよく似たる瑞瑞しき葡萄の表紙絵
ひと粒の葡萄を挽ぎて食べたしも表紙絵のタツチに感動しつつ
筑波嶺の元朝拝を欠かさざる兄に背負われき五歳の初日
ポツポツと人影寄せる山頂に神神しきかな御来光拝
眠いよと愚図るわたしに綿入れを着せたる兄の樂しげなりき
黒豆と煮物はどうか作れたり今年も息子達揃いて呉れる
初雪に庭はすっかり雪化粧転ばぬようにと心得ひとつ

倉 浪 ゆ み 埼玉

マスカットあな瑞みづしそのみどり表紙に載りてにひ年となる
本年は米寿と成られる嶋田さん百号描くと漲るパワー
歌会に参加せし人前向きで我も大分元気になりぬ
けふ三日川越の町は賑はひて初大師なり古刹喜多院の
初参り氏神様に願ふこと無病息災かうべをたれる
にひ年は長男の干支うま年ぞ恙なくあれと願ひし我は
末の子の亡き世の中は改まり哀しきまでに空晴れわたる
孫からのロールキャベツの希望あり面浮かべつつキャベツ茹でゐる

林 美智子 ☆ 東京

霜解ける頃見計らい湯湯婆ゆたんぼの水撒きてやる畑の野菜に

畝間には冬と言うのにびっしりとホトケノザ茂り草刈りをする

月三度無農薬野菜届くなり主婦の趣味とは言えぬ美味しさ

友の作る里芋・ジャガイモ・ネギ・白菜・長芋まであり多種に驚く
ひよこ豆棚の奥より見つければストーブの上でふつつと煮る

記憶力落ちたと言わず励めども「とんとんむかし」の後が続かず
いづこかで工事あるらし用水の流れ止められ水底あらわ

真白なる小鷺飛び来て水の無き用水の底をゆっくり歩く

本 郷 歌 子 ☆ 栃木

右肩の腱板断裂と告げられて募る痛みに冬空見上ぐ

腱板断裂にパンジーが四株箱の中冷たき風に花びら揺れる

右肩を庇うつもりが右利きは咄嗟に右の手が先に出る

来夏は薔薇咲く英国訪うと姉との約束リハビリに励む
おにぎりは自分で作ると決めました血圧高き我は塩なし

楽しみのひとつ増えたり月一の仲間たちとの麻雀教室

推し選手のサインの入ったユニホーム大当りして今年暮れゆく

幼子は三人三様に動きゆく賑やかさ溢れる正月三日

「かまもち」伝承会

村 上 美 江 岩手

郷土食の匠の「かまもち」を受け継ぎ習ふ高校生に
久久の調理実習参加せり高校生の講師嬉しも

食物料存続ならむ改めて底力知る高校生

すべすべと「かまもち」の皮撫で上げて餃子の如く片栗粉を塗る
伝統のカマの形の「かまもち」を茹で上げ水にさらせば艶増す
「かまもち」の一口目より辿り着く黒糖クルミごま味噌餡に

母娘してエプロン当てて「かまもち」を土産にしたり伝承会の
楽しみの試食の時間に味はへば「かまもち」全て香り立ちをり

松 中 賀 代 ☆ 高知

足の力とり戻すため日に一度外を歩きぬ風に押されて

香北橋過ぎて景色を眺めては無事に退院胸なでおろす

空の色も日差しも風も変わりなし三ヶ月過ぎ吾が庭にたつ

車からやっと降りたつ吾のこと迎えてくれる隣の猫も

三鉢のピオラは株を太らせて留守の間も花は絶えずに

伊 澤 直 子 ☆ 東京

年明けにいつもの道の紅梅は七分も咲けりひと月早く

初詣井草八幡は賑わいて列に並び参拝をする

孫たちの健やかなるを願わんと「夢むすび」なるお守り求む

孫たちとたこ焼きの鍋囲みたれば「鍋奉行」は孫の引き継ぐ

若きころ追っかけていた事もあり孫らは娘と鶴見に出かける(箱根駅伝)

十六夜の月の近くに光る星あれがシリウス名は知っている

シリウスの近くにうつすらオリオン座娘のことばを頷いて聞く

乾 義 江 ☆ 茨城

突然の二重に見える目の変化MRIの異常無しとふ

乱視有りを作りし眼鏡に帰宅すれば何故か頭の具合の悪し

息子夫婦の調べ呉れたる眼科医の軽き白内障と目薬処方す

眼科医に紹介されし眼鏡店主乱視のレンズを手直し呉れる

此のところ入籍済ませた孫と彼事あるごとに銘打ち訪ね来

キラキラと青海原の阿字ヶ浦二人は嬉々とスマホに収める

頼まれしうなぎの蒲焼きに塩辛を魚市場に買い二泊し帰る

年越しを切り替えようと八王子より息子夫婦の迎えに任せる

永 光 徳 子 ☆ 東京

日没の僅かに延びた茜空帰巢のムクドリゆるやかに飛ぶ

ガタガタと雨戸を叩く風の音山火事の地を思いて祈る

古きより欠かさず届きし年賀状遂に途絶えて友の身思う

海岸を車走らせ峠を越えて娘夫婦と年越し旅行

大空と大海原を朱に染めて今年最後の太陽沈む

西伊豆の海岸よりの初富士は紺碧の中白く輝く

キャンドル 松 本 英 夫 東京

その昔息子を乗せて小田原へ今日は息子に乗せられてゆく

年末に日常捨てんと渋滞の延延つづく真鶴道路

雪山や街ゆく電車と貨物車に目を輝かせ孫はあと追ふ
食べて食べて食べて食べて食べまくれ孫らの向かふホテルのビュッフェ
雨傘と皆との泊り贈られて笑顔の妻はキャンドル吹き消す
青空に雲ながながと棚引きて水平線より朝日の昇る
パーンと音炸裂しストライク拍手に応へ息子は手を挙ぐ
日差し浴びラケット握り打ち返す小六の打つボールが重い

大塚 照美 兵庫

東京の姉との最期のいとまごひわが躰調に鈍る決断

真夜中のメールは姉の訃報にて段取り考ふ眠れぬままに
姉の葬儀に二つ返事の三たりの子徳島名古屋千葉より上京
姉逝きて心の内に見送りぬさざんくわ散りて溢るる追慕
母の棺に冷却剤を入れ待ち駐在のタイより帰国の姉を
それぞれが年始すませて帰省とふさればひとつ買ふ年越しの蕎麦
清水寺の「今年の漢字」は「熊」なりと恐縮してゐむ亡父熊夫は
スマホなど扱ひ難き世に在りて短歌に勤しむ間もなく卒寿

三好 規子 福岡

茅葺きの料理茅乃舎に嫁と我の生日祝ふと子が連れ呉れぬ

水無月に蛍の飛ぶとふ山あひの清流みつつ食ぶるランチコース

施設にて十一月生まれの我ら三人ケーキにて祝はれ花束もらふ

その庭の樅と赤黒の木の實にて作れるクリスマススワッグが友より届く
先月はロスアンゼルス今月はニューヨークに旅するカナダの孫は

仙如寺の樹齢四百年の大楓一葉も無く散り敷く紅

千の慈眼千の手を持つ重文の五米近くの観音見上ぐ

黄金色のいちやう吹雪を浴びながら師走の並木の道を歩みぬ

須藤 紀子 埼玉

八高線にハイブリッド車両の導入で田舎にひとつ新しきもの

会釈して走り過ぎたる自転車はああ君だつたねもう中学生か

まづ珈琲淹れて冬雷読み始む歌の響きに共鳴せむと

冷めてなほ矜持を曲げぬ香り持つトアルコトラジャをこよなく愛す

寒の風怒りのごとく吹き抜ける庭に埴輪は立ちて倒れず

黒雲の帯が地平を覆ふさま何の兆しと怪しみて見る

神棚に天照大神祀れども女帝否定のこの国可笑し

佐藤 靖子 東京

愛用せるスワンの刺繍のブックカバー次ぎ読む本に掛けかへてをり
どんぐりの林をつくり始めたる画面のハンターに言ふ「さうですとも」と
テーブルのからつぽのお盆の日溜りに猫をさまりぬちよつと叱れず
いま海に地震の多く近よるまじさういふ時に用ありて行く

洩りつつ海辺にむかふ車中より大船観音に頼みたる無事
悪徳の業者の仕業と見て過ぐる丘陵すべてに蝟集する家
過半数みたいな体とわれのこと笑ひし母よ仮分数といふ今
今様に黒歴史と言つてしまへば来し方の恥かるくなりたり

齋 鹿 ミヤコ 神奈川

富士山に連なる山の端いよいよに際立つ頃の火の色の空
新年の三日目暮るる1号線へツドライブトは渋滞してをり
旗を振り声あげ応援したること数年まへの箱根駅伝
駅伝の学生の足さはやかに近くの坂を駆け抜けてゆく
わが街の名の大鋸の由来なる鋸ひとつ神社に残る
わが街の地名となりし大鋸に残る柄のなき鋸の刃
大鋸の山の大木伐り落とし舟作りきといふ鎌倉時代
実朝の注文の船の材料となりける大鋸の山の大木

鈴 木 計 子 東京

また来たる殿ヶ谷庭園の鹿威し心うるほしくれにき前は
美しくなりゆく記憶のせみなりや殿ヶ谷庭園のけふの鹿威し
茅葺きの駅舎の中に囲炉裏あり会津鉄道湯の上温泉駅は
地野菜が買ひたき値段に置かれあり茅葺き駅舎の囲炉裏のそばに
一本のねぎにすくふは無理と知る大内宿に頼むねぎ蕎麦

この太き真直ぐなるねぎ一本にて蕎麦食べらるる人いく人をりや
降り出せる雨の冷たき大内宿見晴台までゆかず戻りぬ
焼きたてが来ますと皿にメモの載る鮎の塩焼き吹きつつ食べぬ

石 渡 静 夫 茨城

無事であることが幸せ何よりも心静めて来る年を待つ
ミサイルの飛ばぬ平和な国に生き茜の空は流れゆく雲
元旦に友は帰らぬ人となる遺影の君は照れてゐるやう
肺癌を患ひ手術後無理をせず元気に米を作つてゐたと
不敵にも俺は煙草を止めないで酒も毎日飲むと言ふ友も
会はぬ間に友の一人はよく学び短歌朗読吹矢の講師を
熊による被害のニュース少なくとも山林火災は相次ぎ起ころ
テーブルに毛糸の帽子置かれたり娘の手編み三日を掛けて

西 村 邦 子 兵庫

受診終へこの年最後の挨拶すれば医師は椅子から立ち上がりたる
薬局の薬剤師らを目で追ひぬ孫がめさせる姿を重ねて
バスに乗る媪のカートを手伝へば坐る女性は席を譲りぬ
このごろは席譲らるる事多しと夫は言へり八十過ぎて
手順より所作が大事と師の教へ優しさの中に厳しさありて
歳重ね気づくことあり茶の稽古師の人柄に学ぶこと多し

去年元旦師の描きたりし七福神年賀状が最後となりぬ

波瀾含みの上海 その1

永野雅子☆ 東京

国内線の遅るるは普通と聞きおるが上海行きが六十分遅延
待ちわびた搭乗時刻アナウンス後パスポートが無いと義妹立ち上がる
出発迄十分を切り義妹戻る搭乗口に皆で小走り

娘婿のスーツケースだけ出てこずにひたすらに待つ小一時間

空港から市内に向かう車の列遙かに続くブレーキランプ

雨足は時間と共に強まりて雷ゴロゴロ最悪の天気

上海のホテルオークラの佇まい古き良き時代の重厚な造り

夕食は近くの飲茶で軽く済ませ帰る頃には雨ほぼ上がる

植松千恵子☆ 静岡

孫達の幼き頃の写真にはどの子も決まってピースサインが

産地の柿簾とは程遠いがたった4本でも甘味楽しみ

風強し自転車向かいて力走す毛糸帽には枯れ葉がいっぱい

酷寒に地震の避難如何する高齢者弱者に配慮あつて欲し

秋空と銀杏並木の続く道落ち葉きれいに掃かれ清々し

七歳と五歳三歳の七五三一歳も詣でて子らに幸あれ

平和とは自分のベッドで眠ること侵略された人等の吐露

川上美智子☆ 高知

榎より落ち葉はらはら散る辺り甘き香仄かに漂つており

びっしりと実のなる枝が青空に大きく広がる南京ハゼの木

室内の深きしじまに秒針の時刻む音瞑想のアーサナ

苛立ちし思い何時しか穏やかにヨーガ教室の終わりを待たる時

祝う事の何も無けれど新米のもち米使い赤飯を炊く

三合の赤飯炊けば有り余り夕食前の友等に届けん

近くには届ける家族居らずして赤飯喜ぶ友あり嬉し

川俣美治子☆ 栃木

重箱をいつもの倍に詰めながら久しき顔の浮かび来るかな

誕生日めでたくもなしと思いつつ孫らの歌は胸に沁みゆく

久しぶり子が飼う犬が前足で膝をチョンチョンわれと目が合う

パリパリと煎餅を食む音ひびき夫は今年も健やかにあり

蛍光灯に緑の粒の動きありカメムシなりけり追うは目のみで

少しづつ日の延びゆく夕暮れに明日も晴れかと空につぶやく

強風に煽られ揺れる洗濯物空を舞台にラテンを踊る

大野茜 神奈川

夕陽受け真つ赤に燃えるニシキギは京のもみぢと競ふ色合ひ

千両をネットで囲み赤い実を狙ふ小鳥にどうだと腕組む

臙脂色の小菊を手折り顔近く懐かしき母の真似をしてゐる

ひそやかに時の移ろふこの原にアキアカネ舞ふ夕焼けの色
脳内の状態良きと言はるれども大河ドラマの役者の名も出ぬ
実りたる甘夏重く枝撓ふ折れはせぬかと支へを足しぬ
空仰ぐ高き社殿のそのうへに神々おはす出雲の大社
痛々し父の植ゑたる春もみぢ幹はゑぐられ蟻の巣となる

小林貞子 山形

不夜城の都に遍く影投げて十七夜の月しんと冷たし
青み初む有明方の月淡し眼下は地平へ続く町並
青空の首都の彼方のわが里に今朝降りしとふ雪は八寸
悲しみは未だ来たらず沸沸と無念と虚無の泡が弾ける
幾万の児らの中より見分くると母のまなこで語りし昔
蘭と薔薇カーネーションの白花の数多に埋もれ笑まふ唇
今まさに白きドレスの裾引きし速き良き日の姿立ちくる
清澄の青きみ空よ抱きとめよけぶりとなりし妹のたましひ

本間志津子 山形

山の端に日が沈みゆき晴るる日の残照淡くしばし漂ふ
残照は薄闇に代りをちこちに灯がともり初む師走の夕べ
冬至まであと三日となる夕まぐれこの年もはや終りに近し
後遺症抱へて生くる吾が子との老老介護四年を経たり

子と二人時に諍ひ看取りつつ五年目となる年を迎へむ
クマが来る冬眠もせず生くるため雪山を越え師走の里へ
狼と同じ宿命辿るのか人との共生叶はざりせば

高橋燿 子☆ 埼玉

何もなき事がよし家に居て看護師療法士に介助さるる夫
テーブルに多国籍の料理が並び若者増えて今年はバツフェ
全員が参加出来て良かったと言祝ぐ夫の感謝の挨拶
順番に頭をパクリと噛む獅子の目力強し金歯が光る
坂登り村社に詣でる人続く鄙びた景色に我が町煌めく
一年の無事を願いて合わす掌に日の温もりとすみたる空と
二泊する孫を引き寄せアイパッド携帯使用の師とする夫
入れ物に補聴器あらず青ざめるいづどこでかと行動辿りぬ
届け出た落とし物は警察に感謝感謝で受け取る補聴器

野崎礼 子☆ 埼玉

朝焼けに遠くビル群浮かび立ち音なき街は息づき初む
腸活と言ってヨーグルトかき混ぜる腹の奥より目覚める気配
かぼちゃと大豆と煮たるとこ煮を朝より炊きつ祖母を思い
部屋中にほろ苦い香り満ち満ちて柚子ジャム煮えるしあわせ時間
目の前で今川焼きを返す手の間一つ入れずひらりと舞わす

中国の大使館訪問頓挫して友好の兆し萎んでしまいぬ
安らげぬ心抱きてこの冬に母のあの笑顔今もあたたか
長いライン文末のひとつ気にかかる画面を閉じて深く息吐く
四季あるを懐かしく思う日来る予感うす紅の空静かに暮れゆく

三月集

益坂順子 福岡

施設より干支馬作りの誘ひあり綿を詰める作業のみにて
蠟梅と山に折りたる松と竹つぼのととのふ南天添へて
感動の失せて来たりて形のみ屠蘇汲み交はすことも終はりか
スキヤキの残りは旨し翌日の二人の昼餉は井にして
庭に咲く季節外れのつはぶきの黄をかかげをり小寒の季
友よりの土産は色よき蜜柑二個紅まどんなのラベルつきをり
新年の初登山なる蒲生山つかれ忘るる奇岩の絶景
縦走は整備されたる一本道マイナスイオンの恵み受けつつ
児玉孝子 ☆ 愛知
木枯しに葉をふり払われて熟し柿冬日に映えてゆたかに下がる

吾の齢に並ぶ者なき忘年会グループに入りて活気出でくる
三度の食何時も独りでなし居れば偶には来よと娘の家族
この年も緑のカーテンつくらんと朝顔の種えらび注文す
同級の仲間元気と賀状書く会うは叶わぬ友との交わり
日記買う神も知らない明日を買う師走に何時もの本屋に行きて
昨年につくり納めと決めたるに年女にて昆布巻結ぶ
床の間に生花を飾り年迎うかたち整う大晦日の朝
紅白をみながらいただくすき焼鍋若者居らず三人の卓

藤田英輔 ☆ 高知

冬至の夜柚子を浮かべた風呂を見て久し振りだと街の若者
幼児のハンカチ、スタイを揺らして北風のなか日足伸びゆく
地の上に氷の衣はおらせて冬は静かに始まる気配
通勤に七十分もかかる子のフロントガラスの霜溶かす朝
夕暮れの光を浴びて老いてゆくように縮まり木に残る柿
赤い服のサンタクロースに泣いた児を節分の鬼は待ちわびている

安川敏子 ☆ 埼玉

新年の空気が会場に満ちてくるワルツから初まるニューイヤークンサート
松の内過ぎて静まる一月の氷川の社に初詣つづく
駅ビルの閉店三日前にして混み合っており寄らずに通る

今年こそ突然襲う事故災難を身を翻して避けて行きたい
「生きててね」笑って聞いた友の言葉今は笑えぬ現実がある
いろいろと検査して尚病名のわからず退院す転ばぬ様にと
いつか皆姿が消える定めにて今年の桜の芽吹き愛しも

奥山清子 山形

「鮎茶屋」の蕎麦食べたしと訪ぬれば「来四月迄休業」の文字
最上川築に寄する波静かなり白鳥一羽流るる如く
飾り替へ減らして床は道元の春夏秋冬みなよろしうた

「百までではたつた三年」とふ姉と天麩羅蕎麦をゆつくり食べる
冷蔵庫の奥に小さき忘れもの古き粕漬旨き逸品

カルシウム菠薐草の三倍とふ小松菜買ひて今日は煮びたし
軒端に夫吊るしたる鳥籠の金糸雀鳴けりAIなれど

蓄音機バイクに積みて来る彼に初めて習ひしテネシーワルツ

岩村知康 長崎

元旦の朝日さしくるわが家にやや束うすぎ賀状配らる
年賀状仕舞ひなど増え年々にもらふ枚数減り続きをり
わが貰ふ賀状の減りし最多なる二〇二五年その訳ありき
料金の値上げによりて葉書買ふ人減り続く去年も今年も

干支などの木版画刷り手書きなる賀状出したり三十余年
わが作る賀状は宛名も手書きにて一言ながら添書きのあり
パソコンで本文あて名も印刷し簡単賀状は主流にあらむ
家族などの写真画質も向上し貰ひてうれし数多の賀状
年賀状「いつやめるか」と思ひつつやはり続けむまづ来年も

羽田孝輝 山形

自然をも制御せむとす人間の傲慢驕りに憂ひ覚ゆる
今朝もまた幼き命奪はれたり緊急銃猟紙面に見ゆる
個体管理緊急銃猟人間の傲慢極まる熊の対策

人間も自然の中の一部なり熊猪もみな同じもの

ジャム作りやうやく終へて今日からは大根切りてペロ干し作る
南天の赤き実啄む鴨はわれに驚き飛びたちてゆく

軍艦の握りの小ぶりに世相知る腹も八分目これも良きかな

去年の冬ビニールハウス潰したる片付けぬうち雪に埋もれる

塚本節子☆茨城

門松を飾る家家少なくて歳神様を何にて迎う

ひところは大き門松に鏡餅市役所玄関に飾られありき

銀行の入口に貼らるるポスターの謹賀新年消えて寂しも

衣替えのたびに取り出す手編みもの捨てられなくてまた戻しゆく

手放そうと思いはすれど手の止まる温みの残る手編みのセーター
夫へと編みし初めてのアラン柄色褪せぬまま半世紀経つ
イーグル柄を編み込むカウチンセーターは茶箱の底に今年も戻す
サスペンスドラマを観つつ編みにしアラン柄過ぎにし彼の日日懐かしくして

首藤 文 江☆ 埼玉

ラジオから「冬が来る前に」の曲聞こえ流行った頃の日々よみがえる
年ごとに来る年賀状少なくてスマホにはない一筆の重さ
来る度に皆で並びて背比べ年の初めの息子の一家
最初だけ気持ちを込めて丁寧な文字を書き込む新しい手帳

◆三月の歌会のご案内

川越歌会のお知らせ
* 3月21日(土) 午後1時～4時半まで。
JR・東上線「川越」西口より500m。
ウエスタ「川越」2階 第3会議室。
* 冬雷本部歌会と同じ方法で、月々の冬雷誌面掲載作品の批評を行います。
司会 倉浪ゆみ氏。
* 実績では毎月8名～10名の参加者。
* 希望者は下記係まで、事前にご連絡をお願いします。

連絡先 ☎安川敏子 (090-4608-7265)
☎野崎礼子 (090-9971-8149)

短歌総合紙・月刊 年間定期購読6000円(税・送料込)
うた新聞 おかげさまで創刊14周年!

短歌の歴史を踏まえた広い視野と新鮮な企画による独自の特集、全国各地を網羅する歌壇ニュース、実力作家の新作、時宜を得た評論、注目歌集・歌書の書評、各好評連載等々、毎月内容満載でお届けいたします。

●お申込みは、いりの書まで

〒一五五〇〇三三 東京都世田谷区代沢五三三十五 シェルボ下北沢四〇三
電話 〇三六四一三八四二六 ファックス 〇三六四一三七八五二六
メール chunon@inosha.com

一月号 十首選

冬雷集

須藤 紀子

一月集

中村 哲也

新表紙絵のシャインマスカットそこはかとなく
くほひたつ絵の具のみどり 大山 敏夫
梢より音なく降りくる団栗の時にはありて落
葉に紛る 天野 克彦
補聴器を外し眠りの深みへとゆく吾を待つか
スパームーンは 高橋 説子
空き家となりたる生家思へど墓参のみ済ませ
て帰る墓掃除して 大塚 亮子
カハセミの執念のごと川底の石の形に眼を凝
らす 嶋田 正之
ベビーベッドの置かれてみたる空間のぼつか
りと開き日差ししたまる 橘 美千代
晩年の母縫いぐれしかいまきに包まれて寝る
肩までぬくし 飯嶋 久子☆
バス停の前に一脚のベンチあり都会の夕日座
らせてみる 田端五百子
生業の漁臭み付く食堂に腹子疎らなはらこ
飯食ふ 井上 管子
常ならば愛想なき老いわれを呼び収獲途中の
大根抱かす 井上 慎子

枯草を頭に被きつつむくむくと曼珠沙華の葉
畔に勢ふ 梶尾 栄子
秋仕舞ふ庭に掛けたる蜘蛛の巣の見事な織り
に払へず残す 東 ミチ
帰途につくバスより眺むる山々に霧のかかり
て墨絵のごとし 松居 光子
大の字に小さき花卉の寄り添ひて秋の陽に咲
く大文字草 佐藤 幸子
旨そうに従兄は三口栗飯を秋の彼岸の生まれ
日に食む 藤田 夏見☆
絶景と案内されたる寸又峽色弱の子に見える
色はも 藤田 夏見☆
スパーの自動掃除機淡々と人混みの中我が
道を行く 津田美知子
白壁に秋の陽ゆらぎ道沿ひの家に猫ゆく長き
尾上げて 松崎みき子
球根を鼠よけにと植ゑにしを曼珠沙華いま生
き生きと咲く 水澤タカ子
山も里も田舎暮らしのいいところ熊に盗られ
てひきこもる日 井上 鈴子

一月号 十首選

●転載歌「うた新聞」十二月号

市街地に熊 中村哲也
山裾に広がる景色にいざ知らず
ニュースに驚く市街地に熊
JR仙台駅から西二キロ住宅街にも
熊の現る
昼休み政令都市の中にあそびに
ここにと熊の話題に
すれ違ふ男児の鈴は熊避けかチリン
チリンと周りに響く
無事に行き無事に帰れと熊避けの鈴
に託せる家族の願ひ

幾重にもさざなみ立てる水面を見てをれば頭の中が静まる 桜井美保子
病院の待ち時間は気持の落ち着かないものであるが明るく光る波の動きを見ながら心の静まるのを感じている。そういえば波の音は胎内に居たときの音に似ているのだと聞いたことがある。波には心を静める力があるのかもしれない。

目撃の情報有りの張り紙にラジオの音を響かせ歩く 齊藤トミ子☆
山に食べ物がなくなつたことで熊などの動物が人家に近づくようになった。その対策として駆除しなければならぬ、という悲しい現実がある。個人に出来ることは自分に近づかないように注意することだけしかないようである。

好きだった丹下左膳の柳太朗が若き時より和歌作りしと 浜田はるみ☆
大友柳太朗が若い頃短歌を作っていた事は私も驚いたが、歌集のあることは

もつと驚きだった。人生は短いが自分の歌を纏めておくことは大きな意味がある。気弱なるわたしを稀に諫め呉る義妹

の微笑みその母に似て 田中祐子☆
すっかり者の義妹に励まされながらその実家となる家を守っている作者。義母との良好だった日々も感じられて一人になつても孤独ではないことに同年輩として嬉しくなる。長い暮しの中で培われた家族の温かい絆がみえる。

金色の葉が楽しげに舞い落ちる食卓から見る公園のこぶし 林美智子☆
食卓から見えるという公園は毎日見ている風景なのだろう。辛夷の葉は秋に淡い黄色に黄葉するようなので晴れた日には金色に輝くように見えて散るのだろう。上旬には何か嬉しい事があつたような明るさを感じられる。

エクササイズのつもりで下腹に力込め大声を出すバスケットの応援 本郷歌子☆
地元のバスケットチームの大ファンである作者。試合前の選手の調子も見逃さない程の熱の入れようだが力一杯の応援

常詠にわたしもの声もありそうだ。

裾分けを禁止の施設とどきたる葡萄いちじく冷凍にする 三好規子

施設での暮らして気心の知れた人と一緒に美味しいねと分け合いたい気持ちを抑えて、「お裾分けは厳禁なのだから仕方がない」と作者の小さな嘆きが聞こえる。背後より近づく音のからからと一つ枯葉の我を越しゆく 須藤紀子
一句目から三句目にかけて何が迫っているのだろうと少しばかりの緊張感。追い越して行ったのは枯葉カラカラと一つに安堵。

立ち漕ぎはふさはしからず八十歳に人のをらねばも一度ためす 佐藤靖子
立ち漕ぎは八十歳にふさわしくないのでか。世間ではそうなんでしょうか。立ち漕ぎを試した結果の歌を読みたいものです。

どのやうにしたら命を彫刻に吹き込めるのか興味は尽きぬ 石渡静夫
今にも動きそうな表情や体の動き。そんな彫刻を見ることがあります。感心し

にはエクササイズになるという利点もあるようだ。日常生活の元気の素になっているのかもしれない。

熊撃ちの猟師はブナの苗木で深山に熊を生かさむと言ふ 須藤紀子
山に熊の食糧になる木を育てたいという猟師の声に目が潤む。餓えていなければ人里に来ることなど無いのに。熊を撃たなければならぬ役目を持つ人のこうした発言は重い。

新生姜を八百屋に見つけ求めたり妻の得意の酢漬けに二キロ 大野 茜
柔らかい新生姜の甘酢漬けは寿司屋さんでは「がり」と呼ばれてとても美味しい。八百屋さん売られているというのが新鮮な感じもするが「妻の得意の」がこの歌の核になっていて温かい。

見舞にと通いたる頃懐かしむ検診の日の父子の会話 高橋耀子☆
退院した父を検診に送る途中であろうか。見舞に行つた日の事を言い合ひながら回復した今を喜んで会話が弾んだことだろう。明るい笑いが聞こえるようだ。

たり感動したり、暫く佇んでの鑑賞。どのようにしたら命を吹き込めるか。平坦な文章ながら三十一文字に惹かれます。

娘婿の実家の門をくぐりおれば我らに刺さる視線の多き 永野雅子☆
異国の生まれの娘婿の生家を訪れ親族一同の出迎えを受け注視された時の緊張感。その一族の立居振る舞い。文化の違いが立ち上がってくる歌。

ぬかるみに機械は無理と若き等が田植長靴履きて手刈りす 小林貞子
稲刈りの田んぼの土は乾き上がらなかつたのだろう。機械はぬかるみに嵌りそうである(あるいは嵌っている)用を足さない。そんな時は長靴は間に合わず田植用の地下たびの出番。鎌で一株ずつ手刈りに若き等(農村の若い者は中年だろうか)の逞しい稲刈りの様子。

くきやかに虹の片脚残る空しぼし釘づけ西日の中に 本間志津子
虹の片側が残っている空だ。西日の中にくきやかに見える。片脚と表現された。過日同じ場面を見たばかりです。

気弱なるわたしを稀に諫め呉る義妹の微笑みその母に似て 田中祐子☆
気丈ながら優しい姑だったのだらう。その娘である義妹に励まされて懐かしく過日を思い出している。

植えたことも忘れられたるいんげんが実りて美味し食卓賑わす 林美智子☆
自然の色と同化したいんげんを収穫の楽しみ。美味しく食べる工夫もされただろう。足るを知る暮らし方です。

エクササイズのもりで下腹に力込め大声を出すバスケットの応援 本郷歌子☆
下腹に力を込めて大声を出す。これは腹式呼吸効率率のより良い、ながらエクササイズですな。

集音器耳に掛けてメガネ付けマスクと帽子と耳は重くて 村上美江
集音器、メガネ、マスク、帽子迄が耳に重力を掛けている。おかし味満載な日

一月号 作品二評

井上 菅子

秋らしくなりたるひと日雨降りて庭を
いろどる苔のひろがり 益坂順子
雨の少ない夏が過ぎようやく降った雨。
秋と雨を待っていたのは人間も苔も。
瑞々しい緑に彩られた庭の様子を「苔の
ひろがり」と詠み、伸びやかな景となる。
鉢植えの数多の蕾二・三輪日毎に開く
野ポタンの花 加藤富子☆

野ぼたんは花の少なくなる秋に咲くの
で、毎日二・三輪咲くのを楽しみにして
いるのだろう。期待は表面化していない
が「丁寧な詠み降りに籠もる。
みかん狩り鈴なりみかんの挽ぎ放題袋
一杯楽しさも詰める 山本述子
鈴なりのみかんの挽ぎ放題は、想像す
るだけで楽しそう。「袋一杯楽しさも詰
める」この一首はここで決まった。
強風が吹き荒れて木々を大きく揺らし道
路に数多の枯葉を散らす 卯嶋貴子☆
字余りで破調だが、強風の凄まじさを

一月号 作品二評

江波戸 愛子

秋らしくなりたるひと日雨降りて庭を
いろどる苔のひろがり 益坂順子
やわらかく広がる苔はみどり色、下
の句に作者の苔を見る優しいまなざしを
喜びを感じる。筆者宅の鉢植えの櫛ノ木
の根元にも厚い苔があり時々指で押した
りして感触を楽しんでいる。

旅行中のパーキング等間の店内は棚いっ
ぱいに栗と芋の菓子 加藤富子☆
車で旅行中に立ち寄ったパーキングで
見た季節のお菓子それも芋と栗で作った
ものがいっぱいに少しの驚きを詠む。笠
間市は茨城県で栗の生産量は日本で、
干し芋の生産量も日本一と識る。

黒豆の枝豆届き早速にビールとともに
ふる里偲ぶ 山本述子
枝豆に黒豆があるのをこの歌に教えて
いただいた。作者にとっては子供のこ
ろから食べている懐かしい枝豆なのが結
句によく判る。

表すのにはむしろ効果的だったかもしれ
ない。下の句が状況を証明する。

ペランダで遥かに高い空見わたして蚊ほ
どの痛みと気休めを言う 安川敏子☆
前二首に身体の痛みを詠んでおり、そ
の痛みも遥かに高い空、つまり宇宙の中
では蚊ほどの痛みと、自らを励ます。字
余りにしても気持を伝えたかった歌。
朝早く愛らしき鳩の三羽みて飛び跳ね
たりす広き駐車場 野口秀子
駐車場も早朝なら安全地帯と野鳥も
知っている。「鳩の三羽みて」細かい具
体で言って場面が見え、三羽の関係性ま
で想像させられる。

立枯れて伐られし跡に植樹なき並木の
道の眺めさびしき 岩村知康
立枯れは一本なのか総勢なのか、並木
は整然と揃ってこそ美しい。ぼつんと一
本空いてもさびしい眺めである。
真つ白な小蕪の浅漬け葉の緑冬の始ま
る覚悟する朝 金子八重子☆
真つ白な小蕪、葉の緑、清々しくも引
き締まった色の取り合せは、厳しい冬へ

青みかん可愛らしいので五日観て黄色
になったら甘みを味わう 安川敏子☆
青みかんは小さめでとても可愛らし
い。青いままでも甘さはあるのだが色づ
くと更に甘さが増すようだ。目を細めな
がら青みかんを食べている作者がうかぶ。

輝ける母の笑顔で目覚めたり今日一日
は良き日にあらむ 奥山清子
いくつになっても母親は恋しい。亡き
母親の笑顔で目覚めた今日を良き日と詠
んで母を慕う作者がみえる。
一言のラインの返事にスタンプに思わ
ず笑う姉の語彙力 金子八重子
最近の携帯のラインを使って会話をし
たりメールを送ることがありラインには
スタンプという面白くて楽しい絵柄が沢
山ある、それらを使って、お姉さんと
のラインを楽しんでいるようだ。

高齢化に園芸の会解散し予定が一つ消
えるカレンダー 首藤文江☆
長く続いた園芸の会が解散となりカレ
ンダーに記す予定がひとつ無くなってし
まった寂しさを詠む。

の心構えの象徴を表すような歌。

高齢化に園芸の会解散し予定が一つ消
えるカレンダー 首藤文江☆
園芸も体力が必要で齢とともに作業は
きつくなるが、カレンダーに余白が増え
るのは淋しいこと。淋しさは言外にある。
日めくりの「牛乳を注ぐ女」見る生日
を祝うフェルメールの絵 高藤朱美☆
生日の日めくりがたまたま「牛乳を注
ぐ女」だった。栄養価の高い牛乳は生
日を祝福しているような偶然を捉えて、
フェルメールは生きた。

トラックを発進せんと下見れば四人の
おさな児ままとして 山崎 猛☆
「下」はトラックの前と解釈した。ま
まごとをするのにちようどよい場所だっ
たのだろう。情景が温かく読まれている。
墓前にて父母想い夫思い出すいのち継
ぐ孫燥ぎて遊ぶ 立石節子☆
父母を夫をしみじみと懐しみ思い出し
ている作者の思いなど知らず、非日常に
孫は燥いで遊んでいる。その光景は平和
なのかもしれない。命を継ぐ孫だから。

二泊する息子の食に変化あり健康志向
の気づきにほつとす 高藤朱美☆
離れたところで暮らす息子さんの食べ
るものが健康を意識した食べ物にかわつ
てきたことを知り安堵する母のおもいが
伝わる。

トラックを発進せんと下見れば四人の
おさな児ままとして 山崎 猛☆
トラックの荷台の下は幼い子供たちに
は楽しい遊び場になったようだ、遊びを
している幼子を見る作者のまなざしがと
ても優しい。
十四年半津波に不明の娘の遺骨を抱き
しめている親あり九月に 塚本節子☆
東日本大震災の津波にさらわれた娘さ
んを十四年半ぶりに抱くことができたご
両親を詠んだ一首に胸が一杯になる。

懸賞旗いくつ出るとか数へゆく皆で声
合はすもまた愉しくて 井出裕子
容赦なく体と体ぶつけ合ふ二階席まで
音響き来る 井出裕子
両国国技館へ相撲観戦に行ったときの
愉しさを詠む。

作品二

小林 芳枝 東京

弟が田舎で作つてゐるといふ二つの林檎並びて香る
屈みつつ木綿豆腐を切りゐたる小柄な母の小きてのひら
張りのある葉にしつかりと包まれて薄紅弁慶の荅現る
ランチパックはピーナツがいいと言つてたねこの頃私の大好きな味
熱はなく喉の違和感続きゐて真冬のあさの体がだるい
飲みたくて買ひたるコーラ冷蔵庫の扉に入れて五日目となる
ゴミ置場に出合ひて挨拶したる後笑ひつつ帰る四階までを
海老芋を剥きつつ思ふ百日草が生えると言ひゐし友の畑を

梶 尾 栄 子 兵庫

霜しるく降りたる飛び石踏みしめて年の初めに地神を祀る
寒き日のストーブに置く黒豆の匂ひの中にモチーフ編み継ぐ
ストーブに炊きゐる黒豆両手にて熱き鍋持ち上下を返す
長き首二重に折りて寒き中溝川に何をつひばむ鷺は
木に掛かる説明読まむと近づくに積もる木の葉につぶつぶ嵌まる
クリスマス終りて折込み広告の二枚ぼつきり朝刊軽し

ゆつくりと身の隅々までが熱くなる造影剤を打たれたる後

「明日より冬のコートに」と夫に言ふ返事の無きに夢と気づきぬ

東 ミチ 青森

冬雷誌一年分の十二冊から吾が歌纏め一冊にする

ネコの番組見ながら去年の今日逝きし吾が猫しのぶ悲しみ癒えて
元朝の外の眺めはドカ雪の深ぶか積り清々しかり

子が言ふに「けの汁も茶碗蒸しも美味しいがアボカドだけは余計だね」と
暦には正月三日満月とあり見上げ探せど月影も無し

佐 藤 幸 子 山形

庭の水木の下枝下ろし見渡せば西山の冠雪間近に迫る

二九日は肉専門の店に買ふ牛肉豚肉合はせて二キロ

知る人の喪中のはがき届く夕年末近くまたも沈みぬ

囲炉裏の上の火棚に干しし沢庵の味思ひだすあさイチ観つつ

マイナス七度初売りの朝の品を載せ凍てつく道を産直に向かふ

焙煎ピーナツに黒糖とコーヒー絡む菓子量産頼むとうれしいメール

笹舟の流さるるやうに七十八年気づけば父の享年を超ゆ

年始代はりと姪より届く「不知火」の箱に幼の絵手紙の添ふ

藤 田 夏 見 ☆ 広島

好きだったひばりの歌を口遊ぶこと増えきたり従兄の妻は

わが家に従兄の家に線香の一筋の焦げ畳に残る
大根の瑞々しきを割るようにスパッとせぬわたしの心
大木にならぬようにと伐る柚子の棘恐れ積む軽トラック一台
セーターは枝ぶりの良き五葉松にかたちを整えふわりと干せり
枝ぶりと数多の梅を思いうらし眺めすかしつ夫の剪定
数多ある梅の蕾のひと枝を年賀の花に選びくれたり

早乙女 イ チ☆ 栃木

ミカンの実少し生ってる野鳥らが食べてるようす楽しそうだな
風吹けば柚子落ちてくる拾ってきて風呂に入れてかおりのしむ

松 居 光 子 三重

珍しく雲の被さり初日の出を拝むことのできぬ幕開け
初詣に向かひつつ見る家家に注連縄かざらぬ門戸の多し

説明書もなく解らぬこと多く使ひこなせぬ新しきスマホ
質問をすること総てメモに取り再びケータイショップに行きぬ

携帯の進歩が速い故といふ四年足らずで変化の著し
初つ端より携帯電話に悩まされ安らぐことなき今年の正月

山 本 述 子 神奈川

どんど焼浜辺に天突く炎あり身も心も暖まりゆく
紅梅の一斉に咲き朝日受く年始に合わせ喜び連れて

年賀状今年は少なく淋しけれどこれでいいのだ年齢相応

浜辺にてきらりさらさらの砂踏めば頭上につんと響き伝はる
節料理セットで購入し年末は手持ち無沙汰で申し訳なし

自家栽培の小松菜春菊味の良く飼兎に感謝す肥料は買はず

卯 嶋 貴 子☆ 東京

着ぶくれて今年の冬は過ごさんと節約をする光熱費対策

へタが取れた今年の柿の皮をむき干物の網に入れて干したり
渋柿を並べて干せる柿すだれ甘くなる頃鳥の寄りくる

加 藤 富 子☆ 栃木

「皮ごと食べて大丈夫」と姪からの贈り物シャインマスカット

みずみずしく描かれているシャインマスカット今年一年冬雷と共に
初詣で頭と足はつややかに天神様なので牛は臥す

今年も賀状納めの知らせあり年に一度の付き合い寂しく

昨年は五年日記の最上段休まず書けた日々のあれこれ
ストープの炎は優しく暖かし昭和の遺物と娘は笑う

修道院の休暇がとれたとラインありてペランダに干す長女の布団

野 口 秀 子 山形

土曜日の休日の日は音の無く静かなりピンクの山茶花小雪を被る
村山の田園風景を未来にと繋ぎて欲しいこのままに

たたなはる朝日連峰くきやかに家並み遙か真白に続く
 長女の嫁ぎ先なる米沢に車に乗せられ新年の挨拶
 地球大紀行を読み地球の歴史知る生物の初めその行く末
 咲き染むる赤紫の小さな花窓辺に鮮やかデンドロビウム

水 澤 タカ子 山形

平山画伯の「生かされて生きる」を再読し今また叫ばむ戦争は否
 砂漠の中に埋もれる文明掘りおこしシルクロードを百回訪ねしと
 三蔵法師唐から天竺へ求法の旅に十七年かけ漢訳には二十年とふ
 薬師寺の三蔵院に四十一年かけて成りたる壁画を拝みき
 シルクロードをはるばる歩き絵に描くは求法の道とふ平山夫妻は
 絵を描くは生きる支へ その柱はあの原爆の土壤に埋りゐる
 床の間の法起寺の松柏見つめをりかさねかさねし緑のやさしさ

津 田 美知子 岩手

母の聞きし南部風鈴チリリンと小さく鳴りて短冊揺れる
 兄と吾と老いて久々歩く里小走りの吾れ昔と同じ
 実家の味は鶏肉入りの雑煮なり祖母のだし汁に敵ふ者無し
 七人の洗濯物干したる竿四・五本今は夫と吾のみ室内に干す
 「買ひ物に行つて来ます」と声掛けす居らざる義母への習慣抜けず
 返納はせずに免許を更新す夫婦で時には遠出もしたい

十日程出没したる熊仕留められ安堵すれども子熊は未だ

小 嶋 知 葉☆ 茨城

突然に腹痛覚え高熱も主治医のまなざし険しく感ず
 六日間医院に通い点滴しウイルス退治して平熱となる
 年末の三十日に二家族集いてわが家は十名となる
 年越そばカウントダウンとにぎやかに若きらの声深夜に響く
 元旦の屠蘇のお酒は「夜明け前」信州からのみやげのひとつ
 新年の挨拶をする夫の顔八十五歳誇らしく見る
 本年も一人お節がそれぞれに娘夫婦の粋な計らい

松 崎 みき子 岩手

山道に鹿の鳴き声甲高くひと雨来さうな雲がせり出す
 餅を焼き膨れるを見て餅つきの成功祝ふ正月日和
 宮沢賢治の朗読をする友の舞台「永訣の朝」は花巻弁で
 永遠を探すと歌ふ今ならば二人で食べる冬のあるまん
 雨傘に当たる睦月の雨の音たんぼの雪は解けてしまひぬ

井 上 鈴 子 山形

可愛げな年玉袋に名を記し夫は子らに渡す日を待つ
 吹奏楽の子のアンサンブルの演奏の始まる頃か餅搗きをする
 喪中ゆるぎ正月の無き姉に送る普段食にと搗きたる餅を

平城宮跡に共に立ちしを思ひ出す夫の透析決まりたるとき
二年ほど塩分カリウムに気を配りそれでも数値は下がりをりたり
兄と義兄の面倒みたる夫なれど己の身のみ勞れこの先
主人のゐない正月初めてと姉のメールに返信惑ふ

紫波りんごのなかより義兄が選びしと聞きたる箱の最後の「はるか」

高 藤 朱 美 ☆ 茨城

庭仕事している頭上を羽田へと音を残して飛行機絶え間なし
三歳の男孫の写真が届きたる七五三の和服も似合いて
華やかなフィリピンの方よりのロザリオは寢床の友となりて祈れり
年賀状じまいをするメモ書きあり友との年月思いて寂し
ゴツゴツでなめらかさ欠くもわが餅はぷっくりかりつと甘味もありて
革ジャンを纏いて女孫は颯爽とオートバイにて我家に着きぬ
孫夫婦初来宅に目のまわる手巻きの夕餉に会話弾みて

金 子 八重子 ☆ 千葉

白内障術後の視界はクリアなり今年の一文字「眼」と決める
円形に焼かれてもやしの箸休め酢胡椒の刺激浜松餃子
年玉と祝い箸にも名を書きて令和七年まずまずと終う
一年をリセットしつつ見る寺の除夜の鐘の音低く響けり
元旦の開店早々半額のお節を求める人々多し

肉まんは熱過ぎ位が丁度いいフーフーすれば旨味増しくる
大吉と決めて一年過ぎすなり呑気に構えておみくじ引かず

立 石 節 子 ☆ 東京

わが家を元旦五時に出発す寮生と共に伊豆の旅へと
障がいを持ちつつ生きる寮生と豪華な旅の三が日なり
太りたく胃にいっぱい食べたれどわが体重は変わらず増えず
五人ずつ世話する人が付いており快適なバス豊かな温泉
ほとんどが中高年の寮生は豪華な食事残してしまう
休み明け仕事に向かう寮生は寮の食事に満足げなり

井 出 裕 子 静岡

年ゆゑに先に延ばすはできないとシギリヤロックに挑むを決す
旅行会社に申込みたれど体力に不安残りて後悔時折り
大好きな旅行なれども初めてにて不安抱へて成田出発す
同乗の八十八歳の嫗居て不安はなしと笑顔で答ふ
来年は孫とケニアに旅すると笑顔で話す米寿の嫗
千二百段ガイドと仲間の励ましで無事に登りて岩山に立つ
友の誘ふアメリカ旅行年齒ゆゑ迷ひみたれど同行を決意す

山 崎 猛 ☆ 埼玉

病む母に乞われて歩みの手を取りき寒き廊下に母のぬくもり

皺にじむ細き母の手支えたるその手に遠き日思い出でけり
ありがとう義兄を見舞い翌日に訃報の届き感極まりぬ
あるときに握手をしておけば良かったと後悔先に立たずを思う
籠りいて歩くことなく日が経てば足腰の衰え身に染みて知る
ふるさとの訛りで集う同窓会名札をつけて遠き日もどる
トランプの利権主張の政策は世界平和に逆行するなり
歳だから仕事やめると妻は言う仕事辞めれば寿命縮まる

作品二

全歌集・全句集

新井光雄☆ 東京

方代の全歌集には方代調溢れる素直さ読むは寢床で
ひらがなで奈良を詠ってふんわりと抱き込むごとく八一全歌集
牧水の全歌集には我が故里鳴虫山に鹿の鳴く声
文庫本二冊に渡るが定家なり四千首越す全歌集なり
西行の全歌集あり岩波の文庫一冊散策の友
漱石に不倫を匂わす一句あり全句集読み小さな発見
放哉の全句集には手紙あって一句の昏さをさらに深める

千句足らず芭蕉の遺した全句集両三度読む近づけぬまま
全歌集全句集やらもう間なく塵とするほか術はなからう

越 澤 太 朗☆ 茨城

正月に小雪を冠る鉢の松玄閑飾り年賀状待つ
元旦の祝いの酒は「八海山」義姉のふるさと味は爽やか
我が畑に初雪降りてほうれん草甘味を増しぬ正月の膳
昨年の栽培野菜十八種期待は大輪ブロッコリー
畑の友と今年も楽しくしたいもの四季を通して農の喜び
歌の友の年賀ラインの挨拶は「今年も楽しい歌会にしましょう」

後 藤 恭 介☆ 茨城

文化の日手塚治虫の「火の鳥」読む漫画の中で古代から未来へ
「火の鳥」の未来編は千年後人間の愚かさ愛情の不滅
寒雨の日パフォーマンズの書道見る躍動して文字を書く女子学生の
映画にて「国宝」を見る三時間歌舞伎の世界の権力闘争
寒い夜花梨酒を飲み熟睡し薬酒の効用実感したり
男料理は酒の肴に合うメニュー簡単美味のチーズ肉巻き
何事も習うより慣れろと友の言う日々の習慣大切にせむ

長谷川 剛 山形

ひとつつつ扉を開けるミステリー東野圭吾に魅せられてをり

透かし橋渡りて松島五大堂風雪に耐ふる暮股に会ふ
凜として寒さ厳しき冬の朝真青な空を白鳥二羽舞ふ

玄関を開けた途端に「ただいま」と五時間かけて吾が子帰省す
帰省したる息子と二人酌み交す荒波越ゆる苦勞を肴に

しんしんと降り来る雪の積もりたる轍のあとに冬来るを知る
満州の社宅で我が生まれたとふ母を偲びぬ一月三日

けふ立冬収穫終へたる木の枝にぼつんと一つ柿空に映ゆ

長澤 千恵子☆ 山形

冬至には小豆と南瓜甘く炊く風邪ひかぬよう三人家族で

眼を病みて術後を過ごす夫のため送迎も家事も一手に受ける

深深と寒さ身に沁む夜孫と炬燵から出て布団に入る

娘より不揃い蜜柑届きたり酸っぱさ甘さ混りあう味

音も無く降りいる雪を戸を閉めて暖取りながら時折り確かむ

青空に雪雨吹雪目まぐるし冬の天気と世界情勢

今野 澄子 山形

夜明けのやうに明るき障子開けたれば月は皓皓と雪を照らしぬ

霧氷林朝陽に輝きダイヤのやう神秘の景色に心清まる

冬至には小豆と南瓜食み柚子風呂と雪なきいちぢゆつたり過ぎる

帰りたる孫の残り香あちこちに片付けるたび思ひは募る

妻亡くし義兄は思ひ出語りをり涙の姿に慰め出来ず

真つ黄色にずらりと並び除雪機は直ぐに稼働の準備整ふ

松田 忠一☆ 山形

山脈に新雪光る小春日はあれもこれもと急ぐ冬支度

濃霧の朝おぼろに光る白き陽よお伽の国へ高速道を行く

寂しさに堪えかねてただ山影に呼びかけてみる秋の黄昏れ

何気ない夫婦の暮しに友は言う「この佇まい静かな幸せ」

立ちこめる晩秋の深き朝霧の静寂を児等の熊鈴がゆく

落ち葉敷く茂吉記念館訪ねゆくみゆきの杜をこころ鎮めて

かさこそと落ち葉の音の透きとおるただひとたびのこの秋が逝く

児珠 純子 山形

鳩サブレ土産に従弟が小春日にわが名付け親の叔父を連れ来る

一時間ごとトイレ休憩老い父の身体気遣ひファミリーカーで

ミニバンの後部座席にかはい娘横須賀育ちの小六、小四

妣のさとの親族八人集まりぬ初対面あり久しぶりあり

念願の山形帰郷亡き父母と長兄の遺影に手を合はす叔父

さとの叔母と従妹は生田流師範仏間に二面お琴のありぬ

調弦し爪を少女の指に嵌め従妹先生琴の手ほどき

姉娘「キラキラ星」を弾きたれば妹は合はす木魚と鐘で

少女等の思ひも寄らぬ合奏に遺影の祖父母微笑みて見ゆ

河原木 光 子☆ 広島

年の暮れ母に会いたいと思う時入院したるといふ知らせ来る
母の肩にボルト六本入りたり転倒からの左肩骨折

笑顔見せ見舞いを労う九十二歳二回の癌を乗り越えし母
年重ね諦めることを受け入れる障子の張り替え今年はなしに
列島を囲いこむ四つのプレートンの暴れぬことを新年に願う

高台にのぼりて拝む初日の出あつまり来たる百三十人
近ごろの地域行事の連絡はペーパーレスにてラインの利用

和田 妙子 山形

年末の第九いつもの風物詩吾が挑戦の日を思ひつつ聴く
年ごとに数の減りゆく賀状なれど半世紀過ぎて交流続く
玄関の山茶花ピンクの花咲きて夏の水かけ報はれてをり
積雪は平年並みと予報聞き疑問の浮かぶ庭の雪見て

鈴木 裕 子☆ 千葉

教えにも頷くほどの力なくただ聴くことに心を置きぬ
柔らかきカシミヤにしばし顔埋む冬の寒さをわれは拒まぬ
八十過ぎの母と八十に近い叔母ねこ四匹と今日を生きおり
帰省後の片づけネコの毛がのこる赤いセーター笑ってはたく

(☆印は新仮名遣い希望者です)

一月号 十首選

作品一 石渡 静夫

対岸のビルの影響し揺らめける河の面に光る
さざなみ

秋らしくなりたるひと日雨降りて庭をいろいろ
る苔のひろがり

八十路過ぎいよいよ別れか捨て時か全集・選
集・著作集まで

今朝もまた大船渡に熊出でぬ国の施策が早急
に欲し

早朝の半覚醒で耳にするショパンのメロディ
いいことありそう

掘り起こしたる落花生「おおまさり」生の香
りと土の匂いす

国政のトップは女性となりにけり川越市政の
トップも女性

黒豆の枝豆届き早速にビールとともにふる里
偲ぶ

ファミレスで先輩二人とランチ会バソコンの
話健康の知恵

大きこぶし春には繊細な花をつけやがて赤き
実今は黄葉

間近にて十八点の彫刻に向かえば作者の息吹
きが迫る

プラタナス並木を歩けば落葉が木枯らしに舞
い視界さえぎる

月を背に黄金スキの香合の蓋に螺鈿の鈴虫
遊ぶ

西窓の水色の空に浮かび来る初冠雪の朝日山
輝ぶ

「甦れ」としおれしわれに呼びかけて紫露草
夜明け濡れ咲く

降る雨の紫式部の実を洗う日毎寒さの増し来
る庭に

どこからか木犀の香り漂いて後ろを振り向き
その木を確かむ

夕餉時旅先の妻にメールして電子レンジの温
め方聞く

穿ちたる淵の青深く濃く澄めり嶋田画伯の白
き滝落ち

幕前にて父母想い夫思い出すいのち継ぐ孫操
ぎて遊ぶ

晩秋の硫黄吹く地で岩盤に温みを買ひ体を癒
す

もう少し安くなるかと待つうちに秋刀魚の季
節通り過ぎたり

急激に冷え込み増せば夏の日のあの猛暑さへ
懐かしき朝

裸木の側に立ちあゝる錦木は深紅に染まり澄む
空に映ゆ

ざっくりと白菜二つに切り分けて迷いさりた
り小春の日和

観戦前地下食堂で「ちゃんこ」食む両国国技
館での楽しみひとつ

名を呼びて声かけられる人のあり初に参加の
緊張和らぐ

豊作の年に下がらぬ米価格不思議に思う経済
の謎

容赦なく体と体ぶつけ合ふ二階席まで音響き
来る

教科書に母が筆字で書きくれし日下部純子今
も懐かし

作品二 大塚 亮子

作品三 天野 克彦

寢室のゆかに草の実落ちてている。そう
だ子どもと草むら走った

片桐美穂子☆

構成のうまい歌だと思えます。寢室の
ゆかになぜ草の実が落ちているのだろう
という疑問を抱かせて読む人を引きつけ
る魅力があります。その理由を思い出し
た下の句で、読者も納得し、寢室から野
外の草むらへと景色が一変します。

「甦れ」としおれしわれに呼びかけて
紫露草夜明け濡れ咲く 松田忠一☆

紫露草の特徴をよく活かして、自分自
身を励ましていくような歌です。夜明け
に濡れて咲いている紫露草の花を見て、
感じるものがあつたのでしょうか。

夕餉時旅先の妻にメールして電子レン
ジの温め方聞く 長谷川 剛

ご夫妻の間柄がよく分かる歌です。電
話ではなくメールで聞くのは、ご伴侶の
状況を思つてのことでしょう。しばらく

すれば返信が返ってくるという信頼が
あつたのことと思えます。

窓の外の紅葉深し一枚の絵画のごとく
迫る山やま 長澤千恵子

絵画のごとくという表現が適格で窓の
外の美しい紅葉を表現しています。「迫
る山やま」という結句に、厳しい冬が近
付いていることを感じました。

断捨離の中の小皿のいとほしく見返し
してはまた手に戻す 今野澄子

断捨離をすると気持ちがあつつきりす
ると言われますが、ちよつとしたものでも
でも執着があつてなかなか捨てられない
ものです。「また手に戻す」という結句
に作者の執着心が表れています。

町内の祭りの売店人群れて秋刀魚の塩
焼き二百円なり 河原木光子

秋刀魚は庶民でも手の届いた安価なイ
メージがありました。昨今は価格が高
騰し高級魚になった感があります。二百
円という価格がこの歌のポイントとなつ
ていて、町内の祭り賑わいの様子をよく
表わしています。

教科書に母が筆字で書きくれし日下部
純子今も懐かし 児珠純子

日下部というのは作者の旧姓と思われ
ます。お母様の毛筆でお名前を書かれた
教科書を今でも大切にされているのです
ね。そこに書かれている文字を見ると、
二度と戻ることのない子供の頃の美し記
憶がよみがえるのでしょうか。

太古の海ひそむ氷の影とらえ月の記憶
を未来へ繋ぐ 手賀稔子☆

宇宙の壮大な空間と時間が感じられる
歌です。科学が進歩しても、月は多くの
謎が残されている天体であることが知ら
れています。月の刻まれた過去を調査す
ることで、どんなことが明らかになつて
来るのでしょうか。

「好きなどこ100は言えるよ今すぐに」
甥と私の猫好き合戦 鈴木裕子☆

思わず楽しくなつてしまふ歌です。猫
好きな者同志のお二人が猫の好きなどこ
ろを言い合っている様子は楽しくてしか
たがないようです。そしてこのお二人の
気の合った関係もよく分かります。

掘り起したる落花生「おおまさり」生
の香りと土の匂いす 越澤太朗☆

普段手にする落花生は秋に畑から掘つ
て乾かしたもの。土から掘り出したばか
りの生の落花生は白くて湿っている。そ
の香りが漂ってくるような臨場感。品種
名の「おおまさり」が効いている。

寢室のゆかに草の実落ちている。そう
だ子供と草むら走った 片桐美穂子☆

眠ろうとしたら寢室の床に草の実が落
ちていた。一瞬なぜ?となつたがああそ
うだったと。一字空きがその間を表わす。
楽しい思いに包まれ眠りにつく作者。

夕風に吹かれつつ咲く白萩のかたえに
燃ゆる送り火淡し 松田忠一☆

夕暮れに浮かぶ白萩と盆の送り火の取
り合わせが何とも言えない風情を醸して
いる。送り火を淡しと詠んだのは作者の
心象風景なのだろうか。

いつの間にか黄金の穂波消え果てて刈

田の夕暮れ人の恋しく 松田忠一☆

秋の日差しを浴びて黄金色の穂波が揺
れていた田も収穫を終えた今は跡形も無
い。賑わいの後の静けさ。人影も耐えて。
そんな時期のものの寂しい感じが下の句に
良く表現されている。まもなく冬が来て
一面の雪原へと変わってゆくのだ。

柄杓のごときクレーン操り三万人の里芋
を煮る芋煮フェスティバル 長谷川剛

学生時代を山形で過ごしたので筆者
も秋には馬見ヶ崎の河原で芋煮会をし
た。懐かしく思い出した。その頃は歌
のような大規模なイベントは開催されて
いず、グループごとに自分たちの大鍋を
持ち寄って芋煮をしたものだった。秋晴
れの空の下皆で食べる芋煮はとてもおい
しかった。クレーンで作ると言うダイナ
ミックな景がインパクトある楽しい歌。

霧深き八幡平の輪郭に白き物見え冬の
始まる 長澤千恵子

百万年前に噴出したいくつかの火山で
できているという八幡平。秋田県と岩手
県にまたがる標高1614mの山および

周囲の高山台地である。十和田八幡平国

立公園に指定されている。そんな山の稜
線に雪が白く積もると岩手県の人々は冬
の訪れを知るのだろう。それぞれの地に
季節を告げるそれぞれの山があるようだ。

教科書に母が筆字で書きくれし日下部
純子今も懐かし 児珠純子

作者のために母君が教科書に毛筆で書
いて下さった名前。整った美しい字で
あつたのだろう。生まれた時からの自分
の本当の名。母の手で書かれた旧姓に子
供の頃の記憶が懐かしく蘇る。女性なら
ではのしやかな感懐がある。

月巡る務め終えたる月面にかぐや眠り
て砂塵となりぬ 手賀稔子☆

月周回衛星「かぐや」は、2007年
9月に打ち上げられた。「おきな(リレー
衛星)」と「おうな(VRAD衛星)」と共に。

2009年6月、務めを終えたかぐやは
月面に落下させられた。巻き上がる砂塵。
そのまま今も砂に埋もれているのだろう
か。宇宙へのロマンに溢れ胸に刺さる歌
だ。

■小野田紀子歌集

『ミモザの風』

令和七年九月二十日、三六七首を収め刊行。六十歳から短歌を始めた著者の第一歌集である。全体に若さを感じられた。

風景を詠うときに擬人法が多くなるように著者にとって心を預けやすいのだろう。

風を見よ風にその身をゆだねよと南京黄
爐の葉のひるがへる
鉄橋にため息ひとつ残りゆく特急「ひの
とり」ひとりも乗せず
目も口も大地に返し石仏はたましひのみ
になりて寄り添ふ

著者は英語の教師であった。

職業は「主婦」と記せり緑月 わがため
に行く英会話塾
子を叱る目ぢからのある子を叱る我が全
力を目に込め叱る

母。

ゆつくりとほころびゆけり母のほほしで
こぶし咲く春風のなか

「いちばんのしあはせだつた」我が庭に
草引きせしを母は言ひたり

樹木に目がいく様子である。「人」のち「白鳥」。

衰ふる櫛におのれの生かさね日々につれ
ゆくざらつく幹に
木には木のそれぞれに木霊の響きあり。
椿はいささかねつとりとして
ゑごの花すでに終はりてゑごの実のくろ
き実落ちて後の時ゆく
夫婦で出掛けては、おいしそうな肴で飲む
歌はとても羨ましい光景だ。

泥付きの葱焼けばかくもあまきゆゑこよ
ひは妻とぬるき爛酒
いちやう並木をゆくととき臭ふ銀杏を翁と
媼かまはず拾ふ
麴漬けの鳥賊の塩辛を肴にしてのんびり
と飲むひと日の締めは
情景。

潮風は少し重くて妻とわれ屈託あればし
ばし黙せり
夜の光と朝のひかりが交差するこの時を
惜しみ妻とたたずむ
明鳥、嘴太鴉の濁みごゑが響きていまだ
暗き暁闇
そして締めのように。

病むことの苦しきもあれば病むことのた
のしさもある入院の日々

(現代短歌社刊)

ほか。

深刻な話となるもカーテンのうす水色に
救はれてゐる
今はただ募金するしかできなくて「ウク
ライナ支援」濃く太く書く

わが裡にあふるるすべてを手渡さむミモ
ザの風よ吹きぬけてゆけ
(彩雲叢書第14篇 書肆 露滴房刊)

題名になった歌。

■大田節子歌集

『猩猩絆』

令和七年九月二十一日、五五四首の第一歌
集。結社に入って十三年でこの数をアツプで
きるのほすごいと思う。他に教育関係の著書
等が四冊それと論文がある。この歌集は広い
学識が背景にあるという印象だ。

そのうちの一つは絵画彫刻などである。
モノの「草上の昼食」に程遠し葉桜のも
と昼餉の男ら
囲みたる梓の黒縁取り外しルオーのピエ
ロと共に飛ぼうか
悶えるな苦悩を包めとロダンの手 ミュ
ゼロダンに迎えくれにき
色彩にも敏感である。

ユトリロの白かと思紛う佐助の花は小道
を通せんぼせり

暗黒の世をはかなむや晩秋のダリアの花
のその猩猩絆
胆礬色たったひと色の絵の前で奴の懐は
かりかねつとも
舞台、施設でジャンソンを唄う。

今の今も核のごとある心残りDマイナー
で君に届けん
車椅子に乗りたる人もコンサートに集い
てくれき歌いてくれき
能登復興コンサートに寄付金の五万円ばか
りを翌日送る。

知っているとちよつと楽しいこと。
落下せる松ぼつくりのこととかさ
閉じいる雨の滴に
当然でありながら、ちよつと不思議な歌。
友の死に友のなかなるわたくしも共に逝
きたり モンステラ揺る
次のようなタイプの歌が多数あり。
あるままの歪な形で売り出さるる林檎の
不安傾きている

(歌と観照叢書第314篇 歌と観照社刊)

■一ノ関忠人歌集

『櫻、その他』

令和七年十月三日、六三〇首を以て第六歌
集となる。最近四年間の作である。日日のこ
と、読書のこと旅のこと体のことそして常に

の漢字十個の連続は工夫が欲しい。
【沢尻たまき】 一首目、このバツタは精
霊バツタであろうか。茶色の個体も見られ
る。お盆頃になると姿を現し、先祖の霊を
送るとも、また先祖が姿を変えたものとも
言われる。台湾では家の近くにいと死ん
だ人が家恋しさに戻ってきたと考えるよう
である(『台湾の民俗』国分直一著)。いず
れにしてもこの歌の背景にはそういった民
族的意識が感じられる。下の句の畏まらな
い自然な言葉選びが特徴的である。
二首目、上の句の漢字の連続について前
評者に同感である。外出先で自然と目に入っ
てきた天気予報に小さな喜びをみつけた作
者。そこを歌にしている。掲載八首の中に
「にちにちの出来事を短歌にする途端些細
なこと非凡となりぬ」があり作者の気付
きと考えが表現されている。

歌壇座標

いつも来るお盆の時期の茶色のバツタ
うちではそれを父さんと呼ぶ 鈴木 裕子
電車内天気予報凶千葉だけが1℃低い
とあるはうれしい

【岩崎 勝】 「冬雷」十一月号「作品三」
から二首を取りあげた。一首目、お盆に父
を偲ぶ歌。千葉では七月に祀るところと八
月(旧盆)に祀るところに分れるが、どち
らにしてもお盆なのだ。バツタが茶色に成
長しているから旧盆か。年毎にお盆になる
と大きな茶色のバツタ(殿様バツタか)が
庭にあらわれる。そのバツタにこと寄せて
父の霊の帰りを祀るのである。親しみを込
めてお父さんが帰って来たよと。声調もよ
く、破断がない。孟蘭盆の情感が余すところ
なく表現されている。

二首目、新型車両のドアの上の行先表示
のその隣りの画面に天気予報が映される。
通勤電車の一駒か。この夏は暑すぎる日が
続いた。気温一度の差だが東京横浜さいた
まより低いのは本当に嬉しい。素直に心情
を発露された。実感なのである。初句から

■「新アララギ」二〇二六年一月号

「歌壇座標」より転載。
*ご批評御礼申し上げます。(冬雷短歌会)

島木赤彦研究会入会案内

●島木赤彦研究会は昭和45年に設立。支部は昭和49年に長野県支部として設立。

●会長 高橋 克

●島木赤彦研究会は、近代日本文学および、近代教育における島木赤彦の業績の資料保全と、調査研究を目的としています。

●そのための研究活動として、研究大会の開催・資料展示会・東京例会・支部研究会などを行っています。投稿などの機会が得られます。●(年会費二五〇〇円)

●本部事務局 江戸川大学 中島金太郎研究室内

〒270-0198 千葉県流山市駒木四七四

☎ 〇四(七一五二)〇六六一(代表)

文学探訪
島木赤彦記念館
監修・下諏訪町教育委員会

大正歌壇の一大潮流
「アラソギ」を
力強く牽引した島木赤彦
ふるさと下諏訪の
赤彦記念館に
その生涯と作品、さらに
成績した教育者としての
業績をたどる。

◆創業1948年、戦後と共に77年！ 伝統と信頼の阪東書店が出版する短歌関連書◆

【最新刊】
形容詞・形容動詞の
短歌コレクション1000



日本短歌協会刊
四六判 1430円(税別)

作者にまつても重要となる形容詞・
形容動詞の使い方を解説している。古典
から現代に至る重要な作例1000を
選定。著者選中の歌人らが選考。文芸
の歴史、作者に役立つだけでなく鑑賞
も楽しい作例となりました。

固有名詞の短歌
コレクション1000

日本短歌協会刊
1430円(税別)

恋の短歌
コレクション1000

日本短歌協会刊
1430円(税別)

短歌用語辞典 増補
新版

日本短歌協会刊
四六判 横書き 4400円(税別)

短歌によく使われる用語の語源と著名歌人の作例を豊富に採り、他に
見当たらない実在する歌集の例も、見出し語三千〇個、可能七面七言

短歌文法入門 改訂
新版

日本短歌協会刊
四六判 横書き 4頁 1980円(税別)

作者に必要な方法を豊富な例文と詳細な活用表で徹底説明。
「短歌文法」の著者が最新小冊子で、愛読者必携の良伴です。

〒118-0002 東京都文京区小石川 6-16-4 阪東書店 TEL 03-3816-3806 FAX 03-3816-3810

編集
後記



▽先月号で土屋文明先生の色紙が紹介され「木花之開耶姫」のルビが「こ

のはなさくやひめ」とあった。助詞の「の」が入っていないなかったので、不思議に思っていたが本号で同じ作品が取り上げられ、ルビについての詳しい解説があった。なるほどと思いつつ勉強させて頂いた。

▽大山敏夫氏執筆の連載で大友柳太朗論に親しんできたが『大友柳太郎歌集「渚」鑑賞』がこのほど発行された。氏が精魂を込めた書き下ろしの一冊。久々の冬雷短歌会文庫というのも嬉しいことである。「渚」の全ての作品の註と鑑賞、さらに二つの論考がある。熟読したいと思う。

▽今月号から作品欄がすっきり見やすくなった。行間も幾分ゆつたりしているのも目も疲れない。じっくりと作品を楽しんで頂きたい。
(桜井美保子)

▽ひさしぶりに冬雷短歌会文庫として拙著『大友柳太郎歌集「渚」鑑賞』を別冊付録とした。ほぼ書き下ろしとなり、下版ギリギリまで粘ってあれこれ考え最終チェックを煩わせた。ここに記し感謝するものである。

▽今年に入って短結社誌の隔月刊化が進んでいるが、詳細を拝見するに、例えば年会費一つとっても様々だ。ある結社誌は月刊時のままに据え置き、ある結社誌は、隔月なのだからと配慮して月刊時の半額に設定する。刊行形態の改革の理由が、経済的な面とマンパワーの不足の両面なのは同じなのだろうが、この違いは何だろう。会費を払うのは会員であるからここの配慮は当然であろう。会費半額にして隔月刊化するのは、様々手続きや雑誌編集等の面で煩雑となりマイナス感のみが大き過ぎる気がする。

▽小誌は今月号から誌面作品欄の読み易さを進めた。全作品欄統一のページ19行組みに舵を切った。あくまで月刊誌を目標に、そこに関わる細部問題を改革する。
(大山敏夫)

▽二月号が最終回となった編集長の「大友柳太郎と美空ひばり」の執筆中に生まれた文庫本。「大友柳太郎歌集「渚」鑑賞」が完成した。基本は歌集「渚」の全ての歌を鑑賞するというものだが作品の中の文法上の解説なども加えられているので歌を作る上での参考にもなり楽しみなから学ぶことができる。歌としての完成度などについても丁寧に書かれているので読み応えがある。一首の歌の中に籠められている作者の心を受け取りながらこれからも歌を読み歌を作ってゆきたいと改めて感じるこ

とができた嬉しい一冊である。
▽十首選担当メンバーのお二人が変更になります。
(冬雷集) 益坂順子氏↓須藤紀子氏
櫻井一江 井上楨子 赤間洋子
▽御寄附御礼申し上げます。
(小林芳枝)

御寄附御礼申し上げます。
櫻井一江 井上楨子 赤間洋子
匿名一

《冬雷規定・掲載用》

- 一、本会は冬雷短歌会と称し昭和三十七年四月一日創立した。(代表は大山敏夫)
 - 一、事務局は「東京都葛飾区白鳥四の十五の九の四〇九 小林方」に置き、責任者小林芳枝とする。(事務局は副代表を兼務)
 - 一、短歌を通して会員相互の親睦を深め、短歌の道の向上をはかると共に地域社会の文化の発展に寄与する事を目的とする。
 - 一、会費を納入すれば誰でも会員になれる。
 - 一、長年選者等を務め著しい功績のある会員を名誉会員とする事がある。
 - 一、会員は本会主催の諸会合に参加出来る。
 - 一、月刊誌「冬雷」を発行する。会員は「冬雷」に作品および文章を投稿できる。ただし取捨は編集部一任とする。「冬雷」の発行所を「川越市藤間五四〇の二の二〇七 大山方」とする。
 - 一、編集委員若干名を選出して、合議によって「冬雷」の制作や会の運営に当る。
 - 一、会費は年額(購読料を含む) 次の通りとし、六か月以上前納とする。ただし途中退会された場合の会費は返金しない。
- *会費は原則として振替にて納入する事。
- A 作品三欄所属会員 一四〇〇〇円
 - B 作品二欄所属会員 一七〇〇〇円
 - C 作品一欄所属会員 二〇〇〇〇円
 - D 維持会員(二部購入) 二六〇〇〇円
 - E 購読会員 八〇〇〇円
- 一、この会則は、二〇二〇年一月一日より執行する。

《投稿規定》

- 一、歌稿は月一回未発表9首まで投稿できる。原稿用紙はB5判二百字詰めタテ型を使用し、何月号、所属作品欄を明記して各作品欄担当選者宛に直送する。原稿用紙が二枚以上になる時は右肩を綴じる。締切りは十五日、発表は翌々月号。担当選者は原則として左記。
- 冬雷集・作品三欄(メール投稿分)
- ・担当 大山 敏夫
 - ・担当 桜井美保子
- 作品一欄
- ・担当 小林 芳枝
- 作品二欄・作品三欄(手書き投稿分)
- ・担当 小林 芳枝
- 一、表記は自由とするが、新仮名希望者は氏名の下に☆印を記入する。
- 一、無料で添削に依る。一通を返信用として必ず同じ歌稿を二通、及び返信先を表記した封筒に切手を貼り同封する。一週間以内に戻すことに努めている。添削は入会後五年程度を目処とする。
- 《Eメールでの投稿案内》
- 白地に一まずつべた打ちにして、行間も空けないこと。頭を一字分空けたり、一首を二行に分断したり、余分な番号を付けたたり、色を付けたたりしないこと。分量の少ない場合は通常のメール本文、又はケータイ・スマホでも送信可能。
- 一、Eメールによる投稿は左記で対応する。
- 大山敏夫 tourai-oooyama@nifty.com
小林芳枝 kysie@nifty.com
桜井美保子 mhoko496@s4.dion.ne.jp

《選者住所》	大山 敏夫	350-1142 川越市藤間	540-2-207	☎	090-2565-2263
	小林 芳枝	125-0063 葛飾区白鳥	4-15-9-409	☎	03-3604-3655
	桜井美保子	235-0022 横浜市磯子区汐見台	2-2-2-608	☎	090-6029-0590

2026年3月1日発行

編集発行人 大山 敏夫
データ制作 冬雷編集室
印刷・製本 (株) ローヤル企画
発行所 冬雷短歌会
350-1142 川越市藤間 540-2-207
電話 090-2565-2263
事務局 125-0063 葛飾区白鳥 4-15-9-409
振替 00140-8-92027
ホームページ <http://www.tourai.jp> 頒 価 700 円

今月の冬雷 (冬雷カウンター) 出詠者数の動向

冬雷集欄	作品一欄	作品二欄	作品三欄	総数
33	31	30	11	105
(-1)	(-1)	(+2)	(-2)	(-2)

*上記は対前月比です。これは即ち、現冬雷の体力数値と言えます。